

総合科学入門講座

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/scienceandhumanity/top.html>

2017年4月28日

授業に対する学生のコメントと教員による応答

★以下のコメントは、提出した順になっています（一番下がいちばん先に提出されたもの）。

まず、今回の講義の要約は、発想法という問題解決のための研究スタイルについて学んだ。問題提起や課題分析、仮説立案などの思考レベルの研究と、野外観察や実験観察などの経験レベルの研究を繰り返すことによって研究を進める。このような研究スタイルを「W型モデル」という。

総合科学部での学びについては、総合科学の意味や価値について学んだ。総合性には、幅広い教養と分野を超えた融合という二つの意味が込められている。幅広い教養とは、ある特定の分野にとらわれずに学ぶことだが、何でも知っているということではない。無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度あり、あれこれ専門知識をあさる必要はない。また、分野を超えた融合とは、違った分野を組み合わせ学問を創造することである。文理を超えた幅広い教養や基礎学力、専門的知識を踏まえた学際性を身につけなければならない。

総合科学の強みとは、既定の概念に疑問を持ち、幅広い視野でものを見て、その上で新たなものを生み出すことだ。すなわち、柔軟性と創造性であり、これこそが総合科学での学びにおいて求められていることである。

そして、今回の講義での主張に対する意見は、論文において「〇〇である」と断言することは、自分の立場を表明することであり、自分が誰かを批判する、あるいは誰かが自分を批判することになるという覚悟を持ったうえで、自分の立場が正しいと主張できる自信が必要となってくるという主張に賛成である。なぜなら、論文を書くということは、あらゆる社会的責任を負うことでもあり、重大なことであると自覚したうえで取り組んでいく態度が求められるからだ。そのためには、客観的な証拠が必要となってくるため、信用できるデータを探さなければならない。

今回での講義では、総合科学部とは何かという内容だった。医学部を卒業すると、医者になり、歯学部を卒業すると、歯医者になり、法学部を卒業すると、弁護士になり、総合

コメント [y1]: 信用できるデータを見分ける力を身につけるために、たくさんの論文や文献を読んでください。

科学部を卒業したら何になるのだろうかということであった。総合科学部の強みは柔軟性と創造性である。様々な視点から総合的に物事を見る力をつけることが必要になってくる。

今日の授業で、総合科学部に所属する私たちは教養学部生として知らないことを知ることが大事なことだと学んだ。また、総合科学部は専門性に弱いので学際性で勝負することも学んだ。私は入学する前は総合科学部で何を勉強するのか何も知らず、2年以降のコース選択に自分の興味のある分野があったので入学した。実際、今回の授業を聞いて総合科学部で何を勉強するのか漠然としか理解できなかった。しかし、無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度が総合科学部では必要なことだという言葉は総合科学部生として覚えておかなければいけない。それは、知らないことがあれば学べる環境下にあるのが総合科学部だからだ。

第三回の講義について

今回は、総合科学とはどういうものか。総合科学部でなにをすべきか。についての講義だった。

入学してから大学に通っているが、総合科学という言葉は一言で表せるようなものではなく、捉えづらい言葉だった。しかし、講義で総合科学の原点が境界人になることと聞いたので、多角的視点を身につけるといふ総合科学入門講座の目的と結びつくと思った。

多角的視点によって、あらゆる視点から問題を考え、問題を解決に導くことが求められているのだと理解した。

また、専門性が高い学問では前例や経験によって問題を解決に導くが、総合科学では柔軟で創造性のある発想で新たな考えを生み出せると気づいたから、多角的視点を身につけることこそが、他の専門性の高い学部と総合科学部との差異だと思った。

今回の授業では、最初にメールの書き方の説明のあと、前回の小テストの解説、授業コメントに応答を聞いた。他の学生の意見で、論文を書く際は、批判を受ける覚悟をもって書かなければならないという考えが、私にはないものであったが、納得したため、今後活用していきたいと、今回のこのコメントから実践する。また、情報を探することは、調べ学習ではないため、正解を探すという考え方ではなく、自分の主張に説得力をもたせるのに必要な、根拠や反対意見となる信用できる情報を調べる。どの情報が信用できるかどうかは、練習していくことで身につけることができるため、多くの論文を読まなければならない。

コメント [y2]: ウェブページで授業ファイルを復習して、きちんと理解しましょう。理解できなかった場合には、どこがどうして理解できなかったのか説明してください。漠然としたまま放置しないようにしましょう。

コメント [h3]: 自分の問題関心を深め、その中で必要な知識を涵養する姿勢が大事です。社会や物事に対して「無関心」こそが、最も問題といえます。

コメント [y4]: どういう人ですか。

コメント [y5]: 「思う」を消して理由を書くように。

しかし、単に論文を多く目にするというだけでなく、主張の根拠になる情報や、反対の立場の情報など、自分に必要で、信用できる情報というものを探すということが重要であるので、その機会を多く作るためにも、論文・レポート制作の数をこなさなければならない。

そして、信用できる情報という話の例で、モーツアルトの曲を聞かせることの効果についての論文が提示された。この論文は信用できないというのが私の考えである。なぜなら、この論文には実際に犬を用いた実験が行われているが、この実験で使用されている犬の種類がバラバラであるため、実験の結果、犬の性格に変化がみられたとしても、それが本当に聞かせた音楽が要因であるかどうかは断定できない。もしかすると、もともとのゴールデンの特性や、柴犬の特性であったりする可能性もある。実験をする際は、結果の要因を明確にするためにも、条件は同じでなければならない。ここである疑問がうかんだ。それは、情報を調べ、自分の主張に根拠や理由を書くことで、説得力のあるレポートを書くことができるが、もしその調べた情報や根拠は正しいのに、自分の主張が間違っているという場合があるかもしれない。浅田さんのこのモーツアルトの曲の効果の論文もそうである。そのときは、主張が誤っていたとしても、根拠を述べ、説得力があれば、レポートというものの自体としては認められるものであるのかということである。

そして今回の授業では、総合科学部の教育理念、 π 字型教育プログラムなど、総合科学部というものについても学んだ。この π 字型教育プログラムの話などは、二日前のキャリアプラン講座で聞いた話と重複するところがあった。それに加えて、教養人、専門家、総合科学部に身につけられる、学べることを話を新たに聞いた。自分の将来に今何が必要であるか、まだ考えている最中であるため、この話は考える参考になるものであった。

第三回の総合科学入門講座では、総合科学部での理念と学びを理解した。大学の各学部では、勉強する事のほとんどが専門教科であり、将来自分がどんな人物になりどんな仕事を持つのかということが入学した時点で限定される。その点総合科学部では総合科学者などといった職業は存在せず、実際に私も、総合科学部とはなにを勉強するところなのかとよく尋ねられる。総合科学は英語で表記すると"Integrated Arts and Science"である。これはいろいろな要素を融合して新しいものを創造するところに意義がある。したがって総合科学部とは (1):ある特定の分野にとらわれず、幅広い教養を得る(2):分野を超えて融合し、違った分野を組み合わせて学問を創造する この2つの意味を持つ。総合科学部には限定された専門教科が無い分、特筆すべき強みを自分自身で身につけていかなければならない。そこで私たちは、境界人になるべきなのである。固定の概念を疑い、幅広い視野でものを見て新たなものを生み出す、柔軟性と創造性を身に付けることが総合科学部での学びにおいて必要となる。

コメント [y6]: その他にもたくさんの問題点があります。

コメント [y7]: どういう意味ですか？

今回の授業は問題解決の手順と総合科学部というものそのものについてだ。問題解決の手順は分野によって出発点や過程は多少違うものの、頭で考えてそれを実行し、その結果を踏まえて分析し、さらに検証を重ねるといふもの。知識とフィールドワーク、2つが揃って初めて客観的かつ筋の通った結論が出せるのである。なぜなら、知識がなければ、なぜそうなったのかが分からないし、知識があってもそれが本当に正しいものかどうかは、実際にフィールドワークによって検証し現実を確かめなければ、知識を裏付けする客観的な証拠が得られないからだ。より多くの人に納得してもらえる結果をこれから発表していくために、これを念頭に置いて学習していく必要がある。

総合科学部とは、単に幅広く学べたり、様々な観点から学べるという、いわゆる「寄せ集め」ではなく、様々な要素を融合し「新しいものを創造する」ということである。そして総合科学部生に求められることは、自分と相手を知り、その間の橋渡しをすることである。そのためには柔軟性と創造性が必要だ。そして創造性の部分、つまり発想は教育では身につけられないため、自分でこれから柔軟に学んでいく中で自分で身につけていかなくてはならない。総合科学部で学んだからこそ得たもので将来勝負していくために、普段から懐疑的な思考を大切に、分野を超えた創造的な発想ができるよう努力していく必要がある。

今回の講義ではこれからの大学生活をおくるうえでの研究の手続きについて学んだ。

1・2年次のコース入門では、3つの手順がある。

1つ目は、問題意識・関心テーマを見つけることだ。たとえば、私なら発展途上国での教育格差についての問題をテーマにする。日本でも教育格差が生じているように、発展途上国でなくても教育格差の問題はある。しかし、**発展途上国での教育格差の問題**は深刻さを極めている。それゆえ、私は発展途上国での教育格差をテーマにしたい。つまり、教育格差が大きい国に注目する。

2つ目は、関連文献の収集・整理をすることだ。まずは、文献リストの作成・文献収集を行い、関連図書・論文の精読・要約をする。そして、文献に掲載された文献・資料・データの収集を行う。

最後は、先行研究動向の整理だ。何が明らかにされているか、何が研究課題となっているかを整理する。この際研究課題が多い場合には、その中の関心のある課題・テーマを中心にとりあげる。

続いて、3・4年次の演習から卒業研究までの手順は6つある。

1つ目は、どのような研究課題について、どういった事象を研究するか、どこの地域を対象に研究するかなどの、仮説の構築である。この際、対象事象・地域は多様な関係性やスケールがあるため、仮説は複数でもよい。

2つ目は、その研究課題・仮説を明らかにするために何を調べるのか分析を行う分析指標

コメント [y8]: 国によって具体的な問題点は異なります。

だ。分析指標を明らかにするための証拠や、文献調査・資料収集・実証実験・現地調査などのデータの収集である。

3つ目は、分析指標の検証やオリジナルデータの構築だ。ここでは、証拠やデータの説明能力が重要である。

4つ目は、検証結果・仮説の検証だ。客観性が担保されているかが試される。

5つ目の、再調査・再分析を終えて、最終的に文章化となり、上記の手続きを順序立てて説明する。

以上が、研究の手続きについてだ。

今回の講義は、大きく捉えて「総合科学部」についての内容だった。

まず、学部目的の確認をした。その目的を端的に述べると、「総合的な知識や視点を身につけた、地域人材とグローバル人材の育成」である。次に、研究のスタイルやモデル、その手続きの流れを確認した。研究をする上で、思考と体験の二つを交互に進めていく必要がある、このことをW型モデルと呼ぶ。また、研究する分野に応じて必要、不必要な段階もあることを捉えておく必要がある。最後に、総合科学部と他の専門的な学部の比較をした。両者それぞれが持つメリット、デメリットを考えた上で、総合科学部はその活動や学習について未だ世間からの理解を得られてないことが挙げられる。このことは、例えば就職活動などにおいて、専門学部生よりも不利になる傾向があるという。そこで総合科学部生に求められるのは、学際性である。「境界人」の定義について確認することでこのことを理解する必要がある。そして、自らの行った研究が何であるかを明確にしなくてはならない。

総合科学部であっても、進級すれば専門的な分野に絞り、深くその内容についての知識を身につけるはずであるが、なぜ専門学部に対してハンディを持つのだろうか。世間の理解が追い付いていないだけなのだろうか。

今回の授業では、総合科学部の意義を再認識した。ある分野に特化した専門家はこの世にたくさんいるが、すべての分野において知識をもつ教養人は少ない。自分の知らないことを知り他人の言葉に耳を傾け、それを受け止める柔軟性、そして他の専門を尊重しそれについて考えることができる想像性が必要である。真の教養人になるためには自分自身をよく理解し相手を知ること。それは日本国内だけに留まらず、国境を越えあらゆる国の人と接する際にも重要である。そのことが異文化理解や国家間の価値観の違いに対する問題解決にも繋がるだろう。

コメント [h9]: 例えば、経済学部で学ぶと経済問題がすべて解決できるでしょうか？経済の仕組みを知ること社会問題が解決できるでしょうか？そこには多義的な要素・要因が潜んでいます。総合科学的な研究アプローチでは、そうした単一システムからの理解ではなく、多角的な視点から多義的な要因を踏まえて、現実的な問題解決索を探っていきます。

今回の授業で以下のことがわかった。一つ目は総合科学部の教育目的が、社会に求められる幅広い知識と多様な視点をもつジェネラリストを養成するということ。二つ目は発想法という問題解決のための研究スタイルがあること。三つ目は、幅広くいろんな分野が集まっている。選択の幅が広く、何でも出来そう。入学してから自分の進路を模索できる。様々な観点から総合的に物事を見る。分野の枠を越えて学ぶことが出来る。などの、幅広い、様々な観点を学ぶことが総合科学部のイメージとして、学生や世間を持たれているが、実際は、総合科学とは、いろいろな要素を融合して新しいものを創造するところに意義があるということ。四つ目は広い教養性を持つためには、**無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度が重要である**ということ。五つ目は既定の概念を疑い、その間で考え、疑問を持ち、幅広い視野でものを見る、ということが重要であるということ。

幅広い視野を持つためには、幅広い分野について基本的なことをわかっていなければならない。なぜなら、幅広い分野で基本的なことを知っていなければ、まず何かについて考えることがないからだ。また、何か新しいものを創造するとき、一つの方向性からだけで考えるだけでは、新しいものは生み出せないからだ。例えば新しく耐震性のある建物を作ろうとしたときに、建築学だけでは作れない。なぜなら、建築学だけを学んでいても、地震に対する知識がないと、どのようにして地震に耐えられるようにするかを考えられないからだ。

しかし、現代ではインターネットなどですぐに知識を得られるのだから、ものを考えるときになって知らないことについて知ればいいじゃないかという意見も出てくる。しかし、ものを考えるときになって知らないことについて知ることはできない。なぜなら、知らないことは、ある程度物事について知っていなければ知ることができないからだ。それゆえ、幅広い分野について知っていることは重要である。

今回の講義は論文の書き方に加えて、研究の手続きについて、そして、総合科学とは何かについて教えてくださった。

前回の講義から、論文を書くということは簡単にできることではないことを痛感し、また、論文を書くにあたってどのように調査・研究を進めていけばいいのか迷っていた。今回の講義は、私の疑問に全部ではないが、大部分を答えてくれたかのような講義であった。研究し、論文にしたいことは決めているが、その研究のスタイルが確立していない私は、「発想法」を研究する際の基本スタイルとしたい。私が研究したいことは思考レベルと経験レベル(体験レベル)を組み合わせた W 型モデルで、野外科学に近いだろう。私はこのスタイルで研究していきたい。

徳島大学総合科学部は様々な分野にまたがって研究することができる、と高校生の頃、徳島大に進学した先輩から教えていただいたが、それは少し違うということが分かった。

大衆人の特徴は「他人の言葉に耳を傾けない」とあった。専門家は自分の専門以外のこ

コメント [h10]: 自分の問題関心を深め、その中で必要な知識を涵養する姿勢が大事です。社会や物事に対して「無関心」こそが、最も問題といえます。

とは全く知らないにも関わらず、専門外のことで自分の主張が正しいと思っているのだろうか。

総合科学部に入学したからには大衆人にならず、様々なことを知ろうとする姿勢を持つ教養人を目指し、「学際的」な研究に励んでいきたい。

今回の授業では、総合科学部について学んだ。まずは問題解決をするにあたっての研究スタイルについてだ。思考レベルと体験レベルな2つに分かれる。学部や分野ごとに研究スタイルがちがう。野外科学の場合だと思考レベルと体験レベルを交互に行う必要があり手間がかかる。どの分野でも用いられる「発想法」は情報収集から情報の整理・構造化から意見集約・意思決定という流れだ。

総合科学部とは何かという事も学んだ。総合性には2つの意味がある。1つ目は、幅広い教養ある特定の分野にとらわれずに学ぶという事だ。2つ目は、分野を超えて融合することだ。そして、教養人となるにはということについての話もあった。大切なのは、他人の言葉に耳を貸す謙虚さ、学ぼうとする態度など人間性に近いものがある。また、総合科学部でよくきく国際人とは、自分を知り相手も知り、その間に橋渡しする人のことをいう。自分が何かを伝えることも必要だが、相手のことも知ろうとする態度が大切だ。

確かに、相手のことをよく知ることで互いの仲が深まる。よく高校の英語の授業で、自国の事を紹介できるくらい知っておいた方がいいと言われていた。自分の事をアピールする積極性と相手の事を理解しようとする謙虚さが必要ということがわかった。

誰かに大学名や学部を聞かれて、「徳島大学の総合科学部です。」と答えると、「そこは何の勉強をするの?」と聞き返されることが多い。私はいつもその返答に困っている。幅広い分野の知識をつけ、二年次には国際教養コースに進みたいとは考えているが、特定のものを学ぶ訳ではないので、説明が難しい。たまた、「総合 科学部」と思って、科学の勉強をするのだと勘違いをされたりもする。しかし、将来目指す職業がはっきりと定まらない私にとっては、総合科学部はぴったりの学部である。今までの狭い社会ではなく、世界の有様や問題を知り、自分の中がかみ砕いていきながら、自分のやっていくべきことを見つけた。多角的な視点を持ち、柔軟な思考力を養うためにも、「相手の話」に耳を傾けることから始めなければならない。

今回の授業で一番考えさせられたのは、総合科学部という学部についてだ。まず私は国語の研究をしようと思っていたので他の学問の領域についてはそれほど取り組もうという気はなく、国語のみ一生懸命やる気でいた。しかし総合科学部とは色々な学問領域に挑

戦し、それらを会得したり、また会得したものを統合することによって自らの可能性を広げていくことができるということであった。私はこの話を聞き、今まで自分は自らの可能性を狭めていたのだと知った。確かに専門的なことを学ぶことについては、それだけ学べばいいのかもしれないが、新しい発想、発見をするためには専門のこと以外のことについても学べる場所は学んでいかねばならないのだ。そのために、私は他人の言葉を耳にかす謙虚さやまづソクラテスが言ったように自分は無知であることを自覚して知らないことを知ったかぶりしたり、放置したりせずに幅広く身につけようとする姿勢を身につけねばならない。そうすることによって私は疑問を持ち、幅広い視野でものを見て、その上で新たなものを生み出す柔軟性と創造性を身につけることができる。そしてそれを身につけた人材は世界で広く活躍することのできるグローバル人材となれる。そのような人材になりたいと思わせてくれた今回の授業は有意義なものだった。

コメント [h11]: こうした理解のもとに、研鑽に励んでください。

今回の授業では前回の小テストの答え合わせ、そして犬とモーツァルトの論文について説明を受けたあと、総合科学部の歴史、総合科学部とは何かを学んだ、

総合科学部の歴史では徳島大学を含め全国の総合科学部がいつできたか、どういった変化があったのかの説明を受けた。総合科学部とは何かの説明では、私が考えていた総合科学部とはたいへん違った説明がされたので驚いた。まず一つ目は、先生の仰った「幅広く学べることが総合科学ではない」ということである。私は昨夏のオープンキャンパスに参加したのだがその時の先生は「総合科学部の強みは幅広く学べることです」と言い切っていたからだ。こういったことは先生間の解釈の違いであってどちらも間違っていないのかもしれないが、一応学校の先生間で「総合科学部とはこういうものだ」という共通理解をしておいてほしい。私は総合科学部に教育、環境、国際、福祉など幅広い分野を学びたいと考えて入学した。先程のように「幅広く学べることが総合科学ではない」と言われてしまうと困惑してしまう。

コメント [h12]: 文章には適宜「読点」をいれておきましょう。

総合科学部の方針としては幅広く学ぶこともできるか幅広く学ぶことが総合科学ではない、ということでもいいんでしょうか?

コメント [h13]: 知識として幅広い教養を身につけることは、人間性を高め、教養ある(分別ある)社会人として求められるものです。もう一つ、大学生として社会から求められるのは専門的な知識・能力です。前者はリベラルアーツ(教養教育)、後者はアカデミック・スキル(学術的技術)とも言えます。言うまでもなく、総合科学部のアカデミック・スキルは学際的・総合的な研究アプローチにもとづく学術研究や課題解決に特徴があります。

「ゴールデンの警察犬訓練の成果や犬種の性格もあるが、モーツァルトを聴かせたゴールデンが素直で優しく容姿端麗に育った。シュトラウスを聴かせた柴犬は勝気で、よく脱出し、感情の表現として、うれしい時、腹の立つときはショパンの「小犬のワルツ」のように自分の尻尾を追っかけぐるぐる回りだす。バッハを聴かせた犬はオスということもあるが、勘が鋭く、とてもエネルギーを感じる。こうしてみるとやはり、モーツァルトを聴いて育った犬が一番安定感のある犬に育っている」(浅田まり子「モーツァルト効果と教育への提案：音楽療法に学ぶ」、愛知淑徳大学教育学会『学び舎：教職課程研究』2008-03-31、35-36ページ)

<http://aska-r.aasa.ac.jp/dspace/bitstream/10638/1096/1/0027-003-200803-031-040.pdf>

この実験についてだが筆者の飼い主としての主観的な考えで論じられており、信用できない。例えば同じ親から生まれた同じ毛並みの同じ性別などの条件下のもとで、音楽だけ違うものを聞かせる。そして筆者以外から見ても目に見えた違いが現れたなら辛うじて実験は信用できるかもしれない。

コメント [y14]: その他に、「実験」として必要なことは何でしょうか。

境界人(marginal man)とはわが身を形成した人間のことで。例えば社会化することにより相手の人々と仲間関係をつくることができ国内では相手の社会への成員であることが許される人、外国接近である目的に関して仲間集いあるいは対話グループをつくることのできる人のことをいう。つまり、対象とする外国へのわが身の社会化に努力することによって相手社会の人々に許容され、話し合いのできる人と思われる存在である。グローバル化が進む近代の日本において必要なのはしばしば誤って解釈されている脱日本人ではなく、異文化社会の接触交流のなかにあって断絶する距離、深い深淵、異質の隔てる厚い壁をのりこえ、両社会に通じ合うものを把握することのできる真の国際人なのだ。

今回の講義で、「総合科学(部)」について詳しく学んだ。ほかの学部では何になるかだいたい想像がつくが、総合科学部だとイメージがわからず、それが長所にもなり短所にもなることがわかった。総合科学部では、ある分野を専門的に学ぶこともできるが、いろいろな分野、例えば経営や哲学や法律などを幅広く学ぶことができ、総合的に考える力をつけることができる。しかし、全ての分野で専門家になることはできないので、幅広い教養を身につけることが、総合科学部の学生には必要だ。さらに幅広い教養とは、いつも謙虚であり、無知を自覚し、学ぼうとする態度を持つことなので、それを意識することも大切である。

コメント [h15]: 自分の問題関心を深め、その中で必要な知識を涵養する姿勢が大事です。社会や物事に対して「無関心」こそが、最も問題といえます。

そして、総合科学の原点は境界人になること、つまり自分を知り相手を知る橋渡しをする人のことで、これには柔軟性や創造性が必要なことで、これが総合科学の強みであると知った。また、相手の話を聞き自分が何者かを話せることは全ての基本であり、これらを身につけるのが総合科学であるということも知った。

今回学んだことを、総合科学部の学生みんなが意識し、発信することが大切である。

今回の講義では、総合科学部について学んだ。医学部で学べば医者や看護師、歯科学部で学べば歯科医師、法学部で学べば弁護士、しかし総合科学部を卒業してどのような職種につけるのか知らず、「総合」としているから幅広いことを学びいろんな職種につけるのだと思っていた。しかし、それは違っていた。バラバラの寄せ集めではなく、いろいろなものを融合して新しいものを創造すると学んだ。また、幅広い教養・分野をこえて融合す

るということも知った。

そして、学際性を追求してきた新構想学部には地域研究型・専門学部隙間型・分離融合型があることを学んだ。この中で徳島大学は分離融合型に属していることを教わった。ここは文系・理系が同居する学部である。

総合科学部の歴史やねらいをきちんと知ったうえで勉強に励む。

今回の授業は「総合科学」と何か、という話だった。総合科学と聞くと専門性を持たないオールマイティーな学問を行うものである、と多くの人が思う。実際自分もそうであった。しかしとても考えが幼稚だった。そもそもオールマイティーに物事を行えることなど社会は求めている。加えてそのようにすべての分野について専門的に知るということは不可能である、ということだった。求めているのはあらゆるところで役立つ「社会人基礎力」である。総合科学部が目指す社会人として基礎力を持った人材になるため、二年次からのコース分けなど様々なアプローチの仕方がある。前述したようにオールマイティーな人材になどなれない。だからこそ多面的で総合的な考えができるひとなに必要がある。アプローチは違うが目指すべきところは皆同じ、とても興味深い学部である。しかし気が緩めば総合という名に隠れ目標を失う可能性が高い。念頭には常に今何をして社会人として質を高めていくのか掲げる必要がある。

今日の授業では、問題解決のための研究の順序や取り組みについてと、総合科学部について学んだ。総合科学部は、専門的な知識や能力を伸ばすのではなく、他人の意見をしっかり受け入れながら、自分自身で考える力をつけるところである。それは、レポートを書くときの心構えと同じだ。例えば、スマホを使うのは良くないと聞くから、その通りだと思わず、本当に良くないのかと疑問を持ち、自分で考えることが大事である。情報に振り回されてはいけない。相手の意見を聞き入れすぎるのでなく、受け入れながらも、自分の意見をしっかり持つ柔軟性が必要であり、求められる力なのだ。また、知りたいという気持ちを持つことも大切だ。外国語大学を英語で書くと、**language university** ではないことには気づいていたが、なぜというところまで踏み込んでなかった。今日の授業でその意味がわかって、すごく納得した。謎が出たら、また新しい教養に出会う。そういう好奇心も大切にしたい。

コメント [y16]: 「自分で考える」とは、「調べ、知り、書き、書き直すこと」ですよ。

今回の授業は総合科学部というものがどういうものかについてと研究の手続き、論文の書き方の説明であった。1年、2年の時はまず問題意識をもってそのことについての関連文献の収集・整理をする必要がある。3年、4年の時は研究課題・仮設を明らかにするために

何を調べるのか、また、どのような証拠が必要になってくるのかを文献調査・資料収集・実証実験・現地調査などを通じて考えていかなければならない。

総合科学部の総合性にはある特定の分野にとらわれずに学ぶことが出来る幅広い教養があること、違った分野を組み合わせ学問を創造することが可能であることがあげられる。総合科学を身につけるには確実な基礎と柔軟な発想力が必要である。

問題解決のための研究スタイルである発想法を学んだ。発想法は、最初に情報の収集、次に情報の整理・構造化、最後に意見集約・意思決定の手順である。問題提起、課題分析、仮説立案、結論からなる思考レベルと、野外観察、エクステンシブ調査、実験観察、インテンシブ調査からなる体験レベルが考えられる。各学問によって研究スタイルが異なることを知った。さらに、研究の手続きと論文の書き方について学んだ。論文の書き方は、問題提起・研究課題、研究手法・仮説立案、調査・実験・分析である本論、結論・課題といった手順だった。また、総合科学部を英語名に置き換えたその意味や、専門主義や地域研究について知った。総合科学の強みを持つには、総合科学の原点に立ち戻り、境界人になることを要する。国際人とは、境界人的存在をさす。異文化社会の接触や交流のなかで、距離や壁をのりこえ、両社会に通じ合うものを把握する人間こそが真の国際人であることを理解した。

今回の授業では、まず最初に小テストの答え合せを行った。そのあと、すごく正論を述べている同級生のレポートをみて自分もなるほどなと感じた。納得できた部分は「自分の述べていることに覚悟を持ってレポートを書かなければならない」という部分であった。レポートでは理由や根拠を書かなければならないため自分のレポートには自信がなければならぬ。反論を「買う」こともあるだろうが自分のレポートを自信を持って書き、認めてもらうにはかなりの努力が必要であろう。そのためにも集大成である卒業論文に向けて、レポートの書き方講座をおろそかにしてはならない。また学業も一步一步こなしていかなければならないだろう。

山口先生の話の後は、問題解決のための研究スタイルといったタイトルでの話があった。思考レベルから体験レベルへと野外観察やフィールドワークへと実際に外へ出て活動することで、座学では見えなかったものが見える。私は海外に興味があるので実際に留学を経験して行かなければわからなかったであろう異文化や国民性の違いを調べたい。

最後に、総合科学部とは何かというお話があった。総合科学部は、英語で **Faculty of Integrated Arts & Science** という。Integrate の意味は全体にまとめるであったり、統合の意味である。確かに幅広く何でもできる学部であるがそれは逆に弱みである。総合科学部を卒業しても何でも完璧に全てが出来るというわけではない。まだ、総合科学部の本質が

コメント [y17]: 受ける
(ないし、「反感を買う」)

理解されていないこの日本で 4 年後、就職活動での面接において「総合科学部で何をして来たんですか」と問われた時、自信を持って自分が総合科学部でやって来たことを言えるようにしたい。そのためにもこの 4 年間、目的を持って取り組まなければならないと感じた授業であった。

今回の総合科学入門講座は、問題解決のための研究スタイルや、総合科学部ではどのようなことを学ぶのか、また総合科学部がどういう人材を育てたいのかということを講義していただいた。問題解決のための研究スタイルは、W 型モデルを使い説明された。W 型モデルは、自分の頭で考える思考と、自分が自ら出向いたり実験したりする体験を交互に行うことで、問題を解決するというスタイルだ。ここで印象的だったのは、多くの分野の研究がデスクワークだけでなく、フィールドワークなどの野外での研究も行なっているということだ。さらに総合科学部の主なコースのうち、地域創生コースと国際教養コースの二つがこれに当てはまるので、総合科学部の生徒として W 型モデルの研究スタイルは覚えておきたい。総合科学部の学びについては、その学びを通して「境界人」を育てたいとのことだった。「境界人」は「専門家」と社会や、地域と地域とを結びいけば架け橋のような存在である。主観的な見方をしながらも、客観的に物事をみる。そういった人間がこれからの社会で必要とされていくのだ。私は今回の講義を受けて、自分なりの総合科学部での学びの理想を考えてみた。それは、専門的な知識を 1 本軸に持ち、かつその専門以外の知識もそれなりに備えている、というのが理想だと考える。やはり人間なので、あれもこれも専門知識を身につけることは不可能に近い。しかし、専門的な知識だけの専門家になってしまうと、専門分野プラス「何か」、「何か」プラス専門分野、という応用力がなくなってしまう。だからこそ専門的な知識以外の知識も身につける必要があるのだ。私は、総合科学部ではこの学びが可能だと考えている。総合科学部だからこそのことは、こういうことではないだろうか。

1.前回のレポートの書き方の復習。「思う」を消して「理由」を書く。「色々・さまざま」を消して具体的に書く等。

パソコンでのメールの書き方について。本文は本文の欄に書く。また、かぎかっこをつけたときの「。」の位置に気をつける。

総合科学部での学びについて。問題解決のための研究にはスタイルがある。思考レベルによって、問題提起、課題分析、仮説立案、結論をだすというもの。体験レベルによって、野外観察や実験観察を行うものである。

また、論文についても 1 年 2 年で入門、3 年 4 年で演習し、卒業研究に備える。

そもそも、総合科学とは何なのか?英語名では IAS(Integrated Arts and Sciences)と表す。

コメント [y18]: どこに。を付けてはいけない、という話でしたか?

総合科学部は新しい学部である。経済、文学、医学、法学など、将来性がはっきりと見えるような学部とは少し異なり、一概にこれを学ぶといったものはないが、たくさんのジャンルのものを習得していけるというものでもない。自分がしたいことを専門的に学んでいくことは総合科学部においてもとても重要なことである。

2.意見

やはり、さまざまなことに興味や関心をもって学んでいくことができる総合科学部においても、しっかりと自分のしたいことを専門的に極めていくことはとても大切なことである。

3.根拠

現実的に考えて、多くのことに手をつけたくても、結局身になるものには限度があるから。それらは背景知識・常識として学びつつ、自分が本当に学びたいものを磨いていくことが最も大切だから。

今回の授業ではまず発想法の W 型モデルというものを学習した。これは問題解決の手順が非常に分かりやすくまとめられたもので、問題提起、課題分析、仮説立案、結論を出すことを行う「思考レベル」と、野外観察、実験観察を行う「体験レベル」を行き来しながら研究していくというものである。そして、これらの手順から論文の序論、本論、結論が成り立つ。今後論文やレポートを書く際はこの発想法のモデルを意識したい。

後半は「総合科学部とは何か」という総合科学部生にとって最も大事なテーマの授業だった。総合科学部の『総合』とはバラバラなものを集めた状態ではなく、いろいろな要素を融合させるということで、そこからさらに新しいものを創造するところに総合科学部の意義がある。総合科学部生は特定の分野にとらわれず、自分が知らないことを幅広く学ぼうとする態度を身につけ、文理を越える知識、関心をもつことができる。法学部や経済学部とは違う総合科学部の強みは柔軟性と創造性であり、相手の話を聞き自分が何者かを話せる国際人になる基礎を身につけることができることである。このような後半の内容を聞いて、今までの自分の考え方が間違っていたことが分かった。私は高校の先生に「この学部ならいろんなことが学べるから、入学してからやりたいことを見つけたらどうか」と勧められて総合科学部に入ったのだが、**multi** の状態からなにか 1 つ自分に適するものを探そうとばかり考えていた。しかし、総合科学部の本当の意義はいろいろなものを融合させることにありと知り、最終的に自分がやりたいことを決めるまでに手を出した異なる分野を活かさなければ意味がないということに気付いた。多くの分野を学べるからこそ目的をもって学校生活を過ごさなければ意味のない 4 年間になってしまうということを改めて痛感した。総合科学部という特殊な学部に入っているながらその意味を理解せず学校生活を過ごそうとしていたことを反省し、今回の授業の内容を常に思い起こして充実した大学生活を送っていききたい。

今回の講義では、論文の書き方、総合科学部について学んだ。私は、卒業する際に論文を書くことは知っていた。しかし、実際何を書いたら良いのかわからなかった。しかし、この講義で問題提起から始まり、結論に終わる過程を聞いて、書く内容、論文を書く難しさを知った。論文を書くために、1年生の時から全ての講義を集中して受け、研究課題をできるだけ多く見つけることが大切である。なぜなら、多くの選択肢があれば、自分のその時の興味に応じて論文を書くことができるからである。総合科学部についての説明はとても有意義であった。境界人(マージナルマン)の話はとても印象に残っている。専門分野に没頭するだけでなく、1歩引いたところで物事を見る。そうすることで、視野が広がり、物事に対する考え方のバリエーションが増える。総合科学部に来て良かったと思えるように、境界人として日々の講義を大切にしていきたい。

今回の総合科学入門講座は、総合科学とは何かという話題や総合科学部での学び方についての講義であった。また、前回の復習では、浅田まり子さんの「モーツァルト効果と教育への提案：音楽療法に学ぶ」という論文が話題に上がっていた。その論文の問題点としてまず、被験体である犬の犬種がバラバラである事が挙げられる。同じ犬であっても犬種が違えばその特性も異なっている。また、主観的な印象や曖昧な言葉で研究の結果を述べていることもまた問題点として挙げられるだろう。

コメント [y19]: 他にもまだまだあります。

今回の講義では、総合科学部の理念、学びについて学んだ。

総合科学部の「総合」とは、単に異なるものを寄せ集めるという意味ではなく、色々な要素を融合して新しいものを創造、創生するという意味である。また総合科学部がもつ総合性には、特定の分野にとらわれずに幅広く教養を学ぶということ、そして学際関係論や文化人類学、地域研究、科学史のように異なる分野を組み合わせた学問を創造するということの二つの意味が込められている。オルテガの書いた「大衆の反逆」を参考に、総合科学部では真の教養人とは他人の言葉に耳を貸す謙虚さがあり、自分の専門外の学問も尊重することで学ぼうとする態度をもち、自身の専門外のことに関しては無知であるという自覚をもつ者であると定義されている。

そして、総合科学部では文理を超えた幅広い教養や大学で学ぶための文系の基礎学力、各自の専門に応じた専門知識、専門分野をふまえた学際的知識を学ぶことができる。これらに加え、規定の概念を疑い幅広い視野でものを見る柔軟性、その上で新たなものを生み出す創造性の獲得を目指す。

講義内で説明があったように、総合科学部では文学や法学、心理学など文系に区分され

る学問を幅広く学ぶことができる。私は、大学では自分の専門分野とするものを既成の学問の中から 1 つに絞り、それを深く学んでいくと思っていた。しかし、異なる学問分野を組み合わせる新しい学問を創造するという総合科学部特有の狙いを知ったため、既成の学問のみに絞らなければならないという考えに固執しないようにしたい。異なる学問を関連させることで、1 つの資料や統計上の数字を二重の観点から捉えることができ、その分多くのことを読み取ることができる。1 年次は教養科目が中心で、専門科目が中心となる 2~4 年次より多くの学問を学ぶことができるので、異なる学問を関連させることを意識して講義を受けていきたい。

今回の授業で私の引用した論文が紹介されて驚いたが、悪い引用の仕方の例として紹介されたのではなくて安心した。前回のレジュメに「牛にモーツァルト」というワードが出たのでそれを検索したら、実際に大勢の学者が研究している「モーツァルト効果」についての記事がたくさんヒットしたので論文があるのではと思い、Google Scholar で検索した。そして、愛知淑徳大学の准教授の「モーツァルト効果」についての論文を見つけた。引用した部分のごくわずかで、犬以外にも高齢者や障がい者の実験も行われていた。しかし、論文にはモーツァルト効果を立証するまでには至っていなかったもので、モーツァルトの曲が実際に生物に通用するかはわかっていない。レポートのネタとして調べていただけだったが、効果が本当に現れるのか興味が湧いた。

今回は、総合科学部の名前に入っている「総合科学」について学んだ。

私は授業の中でもあったように、総合科学部の「総合科学」を幅広く学ぶことができる意味だと認識していた。なぜなら昨年の入試説明会で幅広く学べるのが利点だと説明を受けていたからだ。しかし本来の総合科学部は、様々な専門分野を学ぶことによって、他人の意見に耳を傾けることができる「教養人」を育成する学部である。

だが、改めて徳島大学総合科学部を見直してみると、総合科学部には理系の科目が無い。理系の科目も同時に学ばなければ、数的に物事を考える人の意見を理解できないのではないだろうか。数的思考を持つ人から見れば理系科目を学んでいない私たちは資料にもあったような「教養人」ではなく「科学者」なのではないだろうか。

以上の点から、理系の分野を含まない総合科学部は本来の総合科学部ではないと言える。

総合科学部では決まったことだけでなく、幅広いことが学べる。これは長所でもあり、欠点でもある。まだ学びたいことが決まっていない者には選択の幅が広がる。しかし、学びたいことがいつまでも決まらなければ、ただ無駄な時間を過ごすということになりかね

コメント [y20]: 私も全文読みました。その他の「実験」と称するものも、多くの問題を含んでいます。具体的にどんな点が問題か、考えてみましょう。

コメント [h21]: 確かに、「本来の」という意味での総合科学部は理系分野が含まれるべきかもしれません。実際、これまでの総合科学部では、自然科学分野についても学ぶことができました。

しかしながら、平成 28 年度の改組で、総合科学部社会総合科学科はより社会的・文化的な課題を学際的・実践的な取組において扱うことになったことから、文系分野を中心とした教育プログラムに移行しました。ただし、教養教育では自然科学分野などの履修を重視し、その中で理系的な視点も涵養することになっています。

ない。また、幅広いことを学ぶということは広く浅く学ぶということになりがちである。そのため、自分で学ぶ姿勢を築かなければ浅い知識しか得ることができない。自分で学ぶとはどういうことを学ぶことも大切だ。大学生になり何をしたらいいのか考えているがまだ決まらないが、時間に余裕のあるうちに様々なことをしたり、資格や検定などの勉強をしたりして4年間の間に何か自分にプラスになることを身につけたい。せっかく大学にきたのだからしっかり学び、社会の一員となっても恥ずかしくないよう過ごす必要がある。

コメント [h22]: こうした姿勢を身につけるためには、社会や文化に対して関心や問題意識を持つことが大事です。

今回の授業では総合科学部についてももう一度しっかり考えることができた。私が徳島大学総合科学部に合格したとき周りの友達に「総合科学部って何するの?」とか、「将来何の職業に就くの?」とか聞かれた。正直なところ、私も説明できるほど理解していなかったし、総合科学部を志望したのは勉強したい学問があったからで、明確な就きたい職業を思い描いていなかったの、自分でも将来どうなるのか不安なところはある。でも今回の授業で、いろんな分野の学問を学んで、インターンシップなど学外での経験も積んで、焦らず模索していこうと決めることができた。

今日の講義は総合科学部について学んだ。総合科学とは何かという質問に対して多くの人が分からないと返答した。私も詳しく何かということが分からなかった。入学する時にホームページを拝見した。分かったつもりでいた。しかし、全然理解できていなかった。これは私達に問題がある。しかし、ここは見ておいてほしいというような情報が欲しいところでもある。そのため情報はお互いが共有していかなければならない。

コメント [y23]: だれとだれですか?

問題解決のための研究スタイルにおいて、発想法というものがあり、それはW型モデルで構成されている。思考レベルと体験レベルに分かれていて、基礎知識、情報収集の役割をする知識の収納庫を中心として構成されている。また、研究の手続き、論文の書き方については、1年2年で問題意識、関心テーマを提示して関連文献の収集や整理を行う。そこで、何が明らかにされているか、何が研究課題となっているかなどの先行研究動向の整理をすることが必要になる。そして3年4年でどのような研究課題について、どういった事象、どこの地域を対象に研究するか、という仮説の構築をするようになる。そこで、分析指標をしたり、その分析指標を明らかにするためのエビデンスやデータの収集をすることで、仮説の検証を行い再調査、再分析した上で卒業研究として文章化するという流れで論文を書いていく。総合科学部を英語表記にすると、Integrated Arts and Sciences になり、Integrate は全体をまとめる、完全にする、総和を示すなどの意味がある。法学部であれば弁護士になったり、経済学部であれば企業に就職したり、文学部であれば小説家などにな

ったりするが、総合科学部は何にでもなれる統合された学部であるから総合的にいろいろな分野から多面的に学ぶことができる。

パワーポイントが鮮やかで見やすかった。

私達総合科学部の生徒は就職活動の際に不利である。専門的分野を学んでいるわけではないからである。総合科学部とは何か、何を学ぶ場なのかを伝える必要が出てくることがある。その点ですでに専門学部の生徒に1歩出遅れている。しかし、理由を説明する際に相手を納得させることが出来ればむしろ高評価につながることもある。全ての分野を総合的に専門知識として学び習得することは天才でもない限り不可能である。自分の必要な知識を選択し深く学んでいく必要がある。

今回の授業では総合科学部とはどんな学部かということ学んだ。何かを専門的に学ぶと一つのことしかわからず、「ものを知っている人間」だと考える。しかし、専門外のことはいくつもの無知である。総合科学は幅広い知識を学んでいくので複数の見方・考え方で一つの問題を扱っていきける。常に食欲にたくさんの専門家から学び、「幅広い知識の専門家」になることが総合科学部だと感じた。

この授業で毎回マークミスがある。マークシートを書く際にパワーポイントで「ここに注意」と警告されている。それでもミスが起きるのは授業を受け身で受けているからだろう。もっと全員が主体的に授業に臨めると授業の雰囲気も良くなっていく。ミスがなくなるのは警告の仕方にもある。注意と書くだけでどうすればいいか書かれていない。何に注意すればいいかわかっていない。お互いが気遣うと授業が良くなっていく。

今回は、大きく分けて総合科学部の説明と、研究や論文を書くためのプロセスの二つに絞って行われた。総合科学部は具体的に何を行う学科なのか、就職先などはどうなっているのか、そしてこれから学んでいくためにどのようなことを必要とするのかなど多岐にわたりました。総合科学部を英語に訳した観点から見ると、いろいろなことがわかるという点、そして「専門主義」といった野蛮性、そして総合科学部は新構想学部であり、その他の国立大学がどのような歴史で出来てきたかなど、総合科学部といえども様々な観点から調べていくといろいろなことに気づかされた。

今回の授業で総合科学部というのがどのようなことを目標とした学部なのかよくわかった。私は将来やりたいこと2つほどがあり徳島大学の総合科学部ではその両方ともを叶え

コメント [y24]: そんなことはありませんよ。

コメント [h25]: 皆さんは、社会的・文化的課題に対して学際的・総合的アプローチ法を身につけて卒業するはずですよ。これが皆さんの売りになりますが、その分学問的視野を広げるための努力が求められます。

コメント [h26]: 「幅広い知識」よりも、こうした「複数の見方・考え方」、すなわち多義的な尺度・アプローチ法を理解の方が大事です。

コメント [y27]: 「感じる」はやめよう。

られ、大学生になってその分野について少し学んでからどちらにするか決めることができるので入学した。だから、私はいろいろなものを総合的に学べるから総合科学部なのかなと考えていた。しかし、今回のお話を聞いて総合科学部はなんでも完璧にできる天才や1つのことにとっても詳しいが他人の意見を聞かない人を作るのではなく、幅広い知識をもちどれも適度に詳しいからこそ他人の意見も聞ける柔軟性のある人や総合職になるのに適す人を育てる学部だと知った。私はこの大学のこの学部を選んでよかった。なぜなら私自身人の意見をあまり聞かないところがあり、視野も狭いからだ。だから私はこの学部で一生懸命学びそのような力をつけていきたい。

コメント [h28]: 期待しています。

今回の総合科学入門講座では、総合科学部に関して、問題解決のための研究スタイル及び研究の手続き/論文の書き方について学んだ。詳しく言うと、総合科学部に関しては、国立大学新構想学部の歩みとして、徳島大学総合科学部(Faculty of Integrated Arts And Science)は1986年に創設され、3度の改変が行われたのち、現在の徳島大学総合科学部社会総合科学科になった。問題解決のための研究スタイルとしては、公共政策学のような実験科学は「問題提起・課題分析・仮説立案・テスト・実験観察/インテンシブ調査・帰納法検証・結論」の順番で問題解決をしていく必要がある。これらはW型モデルといい、アクティブラーニングの1種である。研究の手続き/論文の書き方として、1年次及び2年次には、まず「問題意識・関心テーマ」を持つことが必要である。次に「関連文献の収集・整理」をしなくてはならず、その際には「文献リストの作成・文献収集」「関連図書・論文の精読・要約」「文献に掲載された文献・資料・データの収集」の3点を行うべきである。先行研究動向の整理として、何が明らかにされ、何が研究課題となっているかを調べ、研究課題が多い場合はその中から関心のある課題・テーマを中心に上げることが重要だ。私は政治に関心を持っているが、問題解決のための研究スタイルを理解できていない分、ただ現在の政治について知ることしかできていない。これから大学での研究に向けて、W型モデルの研究方法を自分の中で確立させていかなければならない。政治に関しての文献は、図書館などでも異なる歴史や政治思想によって多く存在する。自分の問題意識に沿って文献収集や論文の精読・要約、孫引きではなく文献に掲載された文献や資料の収集が必要となる。

私は総合科学と「ゆい」言葉の意味をきちんと考えたことがなかった。また、改めて総合科学とは何かと聞かれると答えられなかった。総合科学部とゆう学部の利点は幅広い分野を学ぶ事が出来るとゆう点だけではなく、専門分野を学ぶことが出来るので就職に繋がりがやすいとゆう点もある。徳島大学のπ型の学習構図を見ると学習方針がよく分かる。徳島大学は二年時に、コース変更があり四つのコースに分けられる。コースごとにそれぞれ

コメント [y29]: これまでのコメントでも一貫して「ゆう」と書いているようです。これからは「いう」と書くようにしてください。

の特色があり例えば公共政策だと、公務員向けの分野の授業が展開される。それぞれの分野に特化したコースに魅力がある。一方で一年時には教養教育科目があり、幅広い分野を学ぶ事が出来、将来何の分野の下で働こうかまだ定まってない人にとって、興味を持つ事が出来る分野探しの方法の一つとなる。私は公務員になりたいので、三年時には徳島大学生協主催の公務員講座を受けるつもりだ。公務員講座を大学外の専門学校などで受講する必要は無く、大学内で受講する事が出来るという事も魅力の一つだ。

総合科学部の英語名は「faculty of Integrated Arts and Science」である。総合科学部は、専門的知識に特化して学ぶ、経済学部や法学部とかとは違い、幅広い知識を学ぶ学部である。幅広い知識を学ぶが、全てを知り、理解する必要はない。偏った知識で、専門家を気取らないようにするために、幅広くいろいろな分野を学ぶのである。

総合科学部の就職状況を確認したが、一部上場企業に就職できている人は非常に少ないようである。それは、大学のネームによる差があるのか、それとも、やはり有名私立や旧帝国大学の学生と比べると能力が劣ってしまうからでしょうか。大学の講義を实际聞いてみて、受験の知識とは全く別のことを学んでいるように思う。それで、**就職に差が出るのはなぜ**なのでしょう。

専門家は知者ではない。

この文になぜそうなのかと疑問を持った。

その理由は、専門家は、自分が研究している部分については他人より実に多くのことを知っているが、それ以外のことについては全く何も知らないからである。だからと言って、無知であるという訳ではない。なぜなら、彼らは科学者であり、彼らの専門分野としている部分については、大変よく知っているからだ。

では、専門家は知者であるのではないか？

少し逆説的ではある。だが、知者とは事理をよくわきまえた人、知人という意味である。だから、**非常に多くの知識**を持っている専門家は知者であると言えるのではないか。

今回の講義では、総合科学部での学びについて学んだ。

総合科学部とは、幅広い分野の知識や発想力を学ぶところである。しかし、これでは他の学部にはない決定的な強みは無いと言える。今回の講義でその強みを理解した。その強みとは、柔軟性と創造性を身につけるといふことだ。

私は教師を目指している。以前に、先生から「生徒に10のことを教えるのに、自分は100の知識がないと面白くて分かりやすい授業ができない」と言われた。私はこの言葉を聞いて

コメント [y30]: いささか古いですが、竹内洋『日本のメリトクラシー』（東京大学出版会、1995年）の第四章の説明が説得的です。大卒就職についての全般的研究としては刈谷剛彦他編『大卒就職の社会学』（東京大学出版会、2010年）、そのなかでも平沢和司「大卒就職機会に関する諸仮説の検討」を参照してください。

コメント [y31]: 何についての知識ですか？

て、総合科学部に入ればより多くの知識を身につけることができると判断した。しかし、今回の講義を聞いてそれだけではいけないとわかった。なぜなら、いくら知識を身につけても、適切に使いこなせるような柔軟性やそこから新たな考えを導き出す創造性が身につけているとは限らないからだ。教師は生徒に知識を与える。その中で、いかに分かりやすく面白くするレベルに到達するかは人それぞれである。実際に、私の小中高と先生の中でもそのレベルは違っていた。私は教師になれば、このレベルを高く保つことを目標とする。そのためには、やはり柔軟性や創造性が必要である。

さらに、柔軟性と創造性を身につけることで 1 つだけの視点からだけでなく、より多方面からの視点で物事を捉えられる。このことは、教師に有利なだけでなく、普段の日常生活でも生かされる。例えば、選挙の時や部活などの時だ。

私はこれから知識だけでなく、柔軟性と創造性も身につけられるように行動する。

コメント [y32]: 具体的にどんな行動をするのですか？

今回の総合科学入門講座では、「総合科学部での学び」についての授業だった。授業では、世間における総合科学部についてのイメージを聞いたり、総合性に込められた 2 つの意味や総合科学を身につけることについて学んだ。

今回の授業で考え直したことは、総合科学部がどういったものであり、そこで学ぶものとは何か、ということである。なぜ考え直したかという、授業で示された総合科学部のイメージは、今回の授業を聞くまで私が抱いていたイメージとほぼ同じだったが、実際の総合科学部とは異なっていたからである。私はこの学部のことをまるで知らないまま受験し、入学した。そして SIH 道場や、オリエンテーションを受講するまでこの学部が学ぶことについてぼんやりとししかわかっておらず、漠然とした状態であった。また、履修登録が済み、授業が始まってからは、世間が持つ総合科学部のイメージの内容と同じように総合科学部のことを理解していた。

確かに総合科学部では、様々な分野について学ぶことができる。例に挙げると、私の時間割も、英語、法律、心理学、哲学など多種多様な学問が存在している。

しかし今回の授業を聞いて、これらの学問を学んでも、ただ知識を持っているだけでは意味がないということがわかった。授業では、「Integration」と「Multi」の違いについて聞いた。そこでは、「Integration」が本来の「総合する」という意味であり、「Multi」は、私や世間が抱いていた総合科学部についてのイメージだった。私が持っていたイメージは、バラバラな知識の寄せ集めであった。

もしこの授業で総合科学部について聞いていなかったら、私はただ知識を持っているだけの意味の無い状態であっただろう。今回の授業を受けて、総合科学部の学生として必要なものは様々な学問で学んだことを有効活用することである。私たち学生は、大学での主体的な学びの姿勢が求められる。そこで、たとえ授業の課題でなくても、社会の問題に目を向け、大学で学んだことを使って社会の諸問題を解決していかなければならない。

今回の質問は、レポートを書く際の引用で昔の文献での用語についてである。昔では普通の用語だったものが、現代では差別用語として扱われるものがある。この場合はどう引用すれば良いのだろうか。

正直な話、総合科学科がどういった目的で成り立っているかといった話はあまり関心のない生徒ばかりである。自分のためになる話であり、未来にかかわってくるのは分かるのだが、結局大半の者は夢がある or 夢がそのうち決まる者であり専門が野蛮だという話は幾分かは仕方ないものだ。限界があるからだ。総合科学科の強みが自明でないからこそ何を積んできたかはとても大切になるだろうが、その話を長々とされても眠くなるものが増えてしまうだけだろう。要するに、今回の白黒プリントの内容が生徒にとってはそこまで大切なことなのだろうか。

コメント [y33]: 通常の仕方（出所表示、明瞭区分、主従関係）で引用してください。もし差別用語が入っている場合には、（現在では差別用語として扱われる言葉が使用されているが、時代背景を理解するために原文のまま引用した）などのように、但し書きをつけておけばよいでしょう。ところで、なぜこの点について質問したのか、理由を書くようにしてください。

ys コメント

総合科学とは何かという事に関心を持たず、ただ学んでいたのでは総合科学部卒業生は法学部や経済学部や文学部にのミニ学部の寄せ集めの学部の卒業生としか理解されません。そうではないと気付いた者が生き残ってきたという実績を紹介するのがキャリアプランの授業です。総合科学部でどの様に過ごすかは、一人一人目的が異なります。授業を参考に各自考えて下さい。総合科学入門講座の授業では総合科学の理念を紹介したのみです。以前は理念とこれまでの私自身の経験をふまえ総合系学部の卒業生がいかにかに苦労して社会で活躍してきたか（どういう人が消えて行ったかも含め）という実態の話を組み合わせて 90 分の授業としておりました。ですので、両方の話を聞いた上で自分はどうするのかということでキャリアプランのレポートをだしてもらいます。総合科学部にはいろんな授業がありますので、一つの授業だけではなく全体の授業を聞いて、総合科学とは何かを考え続けて下さい。

* 資料について

大学の授業には半期の授業で 2 単位のもの (L 講義)、1 単位のもの (S 演習)、0.5 単位 (E 実験) があります。この授業は 2 単位の授業です。なぜなら 90 分の授業に対し、学生各自が予習 90 分、復習 90 分をするという前提で単位が出されているからです。教科書や配付資料があるのは予習や復習のための材料です。講義を聞くだけが授業というではありません。文系の講義は配付された資料やテキストを予習復習として読むことが求められているのです。またよい文章を書くためには、文章を読まないといけません。世間では本をたくさん読んだ子役タレントが国語力をつけ難関中学校に合格したと騒いでいますが、それは大学生も同じ。大学生なら難解な文章を敬遠するのではなく、それを読みこなす訓練が必要です。それを通じて文章力が上達し、先生たちをうならせる文章が書けるようになるのです。

僕は徳島県出身だから地元にある国立大学である徳島大学になんとか進学し、総合科学部と言う聞いたこともないような学部に入ってこれから大丈夫かなと思っていたが、今回の講義を受講して総合科学部は単なる変なマイナー学部ではあらず、法学部のような一つのことばかり学び狭い視野でしか物事を見ることしか出来ないのでは無くて、多数に渡る文系の分野を柔軟に対応することが出来る素晴らしい学部であると認識させられた。

総合科学部では何を学ぶことが出来るのだろうか、これは徳島大学について調べているときに疑問に思ったことだ。パンフレットを見てみると教養教育から始まり、コースに分かれて専門分野の知識を得ていくという風にした。様々な分野を学ぶことが出来る半面、内容が浅くなってしまうのではないかとというのが率直な意見だ。総合科学部で学ぶことによって他人の言葉に耳を貸す謙虚さやほかの専門を尊重し、学ぼうとする態度を改めていくことで、相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる人間になっていきたい。

徳島大学に入学して約 1 ヶ月であるが、徳島大学の創設の歴史や変遷を細かく知ることができ、今後の自分が学習に取り組む態度を考えるきっかけとなった。総合科学部は大学の「専門的な分野のみを勉強する、狭く深くの学習」という固定概念を覆す「一般的な教養を幅広く勉強する、広く深くの学習」ということを理念としており、高校時代までに将来が決まっていなかった多くの人々にも学べる機会を与えるものである。また徳島で進む少子高齢化や若者の流出を防ぐための地域活性化の活動も積極的で、生徒自ら学び行動する力を育成することができる。これらのことを大学生活に慣れてきた今もう一度頭に入れておくというのも、これから生徒が講義をめんどくさいなどの理由で行かなかったり、課題の提出を怠ったりするという行為の発生を防ぐのに効果的である。そして、学生が徳島大学で学ぶ意義を考え直すいい機会となった。レポートの書き方についても第 1 回目から引き続き講義をしていただき、教科書のどのページを参照すればよいかなどわかりやすかった。しかし、スクリーンにもっと例示をしてほしいと思う。貴重なお話を教えてもらっても、画面を消すのがはやくメモを取れないことがあるので、パッとみて内容がわかるような絵を用いてほしい。

今回の授業では、総合科学部の本義を学んだ。すなわち、英語名で **iintegrated arts and sciences** という。私は大学は研究機関であるので、専門的であるのが当たり前だ

コメント [h34]: 人間性を高めるだけでなく、総合科学部での学びに際しても、こうした姿勢が必要になります。

コメント [y35]: そのためにウェブページで授業ファイルを掲示しています。メモを取れなかったところは自分でしっかり復習することが必要です。

と以前は考えていたが、資料で「専門主義」の野蛮性を読みこの考えを改めることとなった。専門的知識を深めるということは逆をいうと狭い、あるいは一面的なものの考え方をするということがつながらやすい。これでは社会にでたときに一部の人にしか都合のいい世の中になる危険性がある。そうならないためには一つの物事を多面的に捉える能力が必要だ。そしてこの能力を備えた人、つまり真の知識人を育てるための徳島大学総合科学部なのである。

今回の授業では、三人の先生の講義を受けた。山口先生からはパソコンでのメールの書き方やカギカッコ内の句点の使い方を学び、平井先生からは発想法についてと研究の手引き・論文の書き方を、葭森先生からは「総合科学部」という学部について学んだ。

まず、パソコンでのメールの書き方について、本文には必ず相手の名前、自分の名前や所属を明記し、メールを送った相手を読みやすいように書かなければならない。カギカッコ内の句点の使い方については、カギカッコの手前で句点を打つと見にくい文章になってしまうため、文の一番最後に打つことが好ましいということが分かった。

次に発想法についてだが、これは問題解決のための研究において、思考レベルと体験レベルを繰り返すW型モデルという研究スタイルの中の一つであり、情報の収集や整理・構造化、意見集約や意思決定を行うものである。野外科学の分野の研究においてとても重要な過程である。

また、葭森先生のお話では、「総合科学部」という名前からは将来につながる職業が浮かばない、というものがあつた。幅広い分野を学ぶことができるところが総合科学部の特徴である。しかし、幅広いからこそ、自分が総合科学部で何を学びたいのか、学んだことを将来どう生かしていくのかをしっかりと意識しなければならない。なぜなら、曖昧なまま学んだだけでは、将来自分が大学で何をしてきたか自信を持って説明することができなくなるからである。

実は入試前、「総合科学部って何をやる学部なんだろう?」と思っていました。気になって調べていくうちに何をしている学部なのかはわかりました。しかしわかったと言っても、せいぜい「自分のやりたいことができそうだ」くらいで、学部そのものの存在目的や教育プログラムについてはよく考えていませんでした。今日の講義で詳しい説明を受たことで境界人や教養人、それを養成する学部の必要性についての理解が深まり、自分のやるべきことがより鮮明になりました。世の中、専門家ばかりでは確かに成り立ちません。

今回の講義では、総合科学部の意義について学んだ。幅広い教養というのは、どの分野のことについても何でも知っているということではなく、知らないことについて知ろうとすることができるということだと知った。オルテガの話にもあつたように自分の知識に絶

対の自信を持ってしまうと、他者の話を聞き入れなくなってしまう。私は人は他者の存在があって初めて人は成長できると考えている。他の誰かの存在がないと自身を相対化し自省することができないからだ。そのため、人の話に耳を傾けないことは自分が成長する機会を失うことだと考えている。だからこそ、自分の意見に絶対の自信を持つのではなく、批判的思考を持ち、人から学ぶ姿勢を忘れずに生きている人のことを教養人であるというのだと考えた。

今回の講義は主に 2 つのテーマがあった。まず一つ目は前回に引き続きレポートの書き方についてだ。宿題の小テストと前回の小テストの解答、学生コメントへの応答などがされた。学生コメントへの応答は授業のスライドを見る限りほとんど答えが教科書に載っているものだとわかったので次回からはまず質問する前に教科書に答えが載っているかどうか確認してから質問したい。また、自分で調べることで人から聞くよりもより記憶に残りやすいので自分で調べるのが良い。

二つ目のテーマは総合科学部での学びについてである。この話は少し難しかったがこの学部でこれから 4 年間学んでいくにあたって非常に重要な内容であった。総合科学部で学ぶに当たって重要なのは柔軟性と創造性である。ここでいう柔軟性とはすでに決まっていることについて「本当にそうなのか?」と疑問を持ち、考え、幅広い視野でものをみることであり、創造性とは柔軟性によって生まれた疑問をもとに新たなものを生み出すということだ。

この講義で自分の無知を自覚するということが人が学ぶ上で大切だとあった。本当にその通りだ。自分は知っていると言ったり、それは自分の分野ではないから必要ない、知らなくてもよいと言ったりしては学ぶ機会をどんどん失い視野は狭くなっていく。逆に学ぼうという姿勢をいつも忘れずにして意欲的に学んでいけば視野は広がっていき、物事の解決や創造により柔軟にアプローチできるようになる。今の自分は無知だ。この気持ちを 4 年間、または社会人になっても忘れず常に学ぼうという姿勢を忘れずに学んでいきたい。

4 月 28 日の授業では、研究のプロセス、総合科学部とは何か、ということを中心に学んだ。

まず研究のプロセスについて。研究は、川喜田二郎さんの『発想法』(中公新書 1967)という本に書いてある、「W 型モデル」にのっとって進めていくことが大切である。問題提起から始まり、フィールドワークや発想法、仮設立案、帰納法などを用いて、「KJ 法」と呼ばれる「情報の収集、情報の整理・構造化、意見集約・意思決定」をしていく。まず 1,2 年生のうちに物事に問題意識や関心を持ち、文献の収集をして、自分の前に何が明らかにされているかなどを調べておく。そして 3,4 年生になってから研究対象を決めて仮説を立て、

文献調査や現地調査などを経て、自分なりの結果を導き出していく。私は研究したいことは決まっているが、仮説はまだ立てていなかったり研究方法は考えていなかったりするため、先生に聞いたり、今までの学術論文を調べたりして自分の研究の方向性をしっかりと決めていきたい。

次に総合科学部について。総合科学部が改組されたのは、「文化・経済・社会・環境を構成する諸要素が複雑に関係し合う地域的・社会的課題の解決には、多様な視点や総合的な研究アプローチが必要なことから、学科間の垣根をなくし、課題を共有できる人文・人間・社会・地域・情報等における「専門分野の実践的融合」をより具体化するために、今回、1学科(社会総合科学科)に改組」したと書いてあった。(徳島大学総務係 改組の趣旨 | 国立大学法人徳島大学 4/28 14:00

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/faculty/about/reorganization.html>)

この趣旨の通り、私たちは人の話に耳を傾けて、自分の専門以外の学問も尊重し、謙虚な態度で知らないことを幅広く学ぼうとする姿勢が求められている。そして相手と自分の意見のいい部分を取り入れたり、逆に疑いや否定する気持ちをもったりして、それについて調べ、さらに自分の考えを深めていくことも大切である。私も、一見必要に思えない情報だとしても、もしかしたらどこかでつながるかもしれないという前向きな気持ちで視野を広くして、自分の領域をどんどん広げられるようにしていきたい。

4月28日の講義では、総合科学部での学びの理念、そして総合科学とは何かについて学んだ。

はじめに徳島大学総合科学部の英語名は「Faculty of Integrated Arts and Sciences」である。Integrate とは「(各部分を)全体にまとめる;完全に作る,完成する」(三省堂「デイリーコンサイス英和辞典」より)という意味である。徳島大学総合科学部では人文科学、社会科学、自然科学といった分野を融合させて学ぶ学部である。複数の分野を融合して学ぶことによって多様な視点や考え方を身につけ、「社会に求められる幅広い知識と多様な視点をもつジェネラリストを養成」(徳島大学、総合科学部の教育・研究の目的、http://www.tokushima-u.ac.jp/_files/00277440/manabi.pdf、4/28 閲覧)することを目的としている。

問題解決のための研究スタイルとしてW型モデルが紹介された。W型モデルとは、自分自身で考える思考レベルの研究への取り組みと、実際に現場へと向かう体験レベルでの研究への取り組みを交互に行うことで問題解決をしようとする方法である。その過程の中で「発想法」(川喜田二郎「発想法」中公新書、1967)がある。発想法にはKJ法(1,情報の収集 2,情報の整理・構造化 3,意見集約・意思決定)や集団で行うブレインストーミングなどがある。全ての学問分野が同じような過程で研究が進められているわけではなく、体験レベルでの取り組みがしよのない学問分野もあり、その学問分野にあった進め方がある。し

コメント [y36]:。の位置について、教科書
6ページを確認してください

かし基本的な方向は同じである。

では総合科学とはいったい何なのか。総合科学のイメージでは、幅広い、なんでもできる、選択肢が多いなどがある。総合科学といった学問分野はない。例えば、医学部を出たら医者に、経済学部を出たら経済学者になる、といった道があるが総合科学部を出たら総合科学者になるといった道はない。総合することの意義は様々なものを融合して新しいものを創造・創生することにある。総合科学とは分野にとらわれず幅広い教養を身につけ、それらを融合させ新しいものを創り出すものである。幅広い教養を身につけ幅広い知識を持つことは、全ての分野の専門家になるのではない。専門家は自分の専門しか知らず、他のものを知ろうとしない。そうなるのではなく、知らないことを自覚し、他のことも学ぼうとする姿勢を身につけるべきである。それが教養を身につけることである。

総合科学にはふたつの道がある。ひとつは知らないことを知り、幅広い教養を身につけることである。しかし幅広いだけでは生き残れない。そこでもうひとつの道が学際性で勝負することである。学際性を追求してきた新構想学部が全国の国立大学で20学部ある。国際・情報・環境・福祉(人間)・地域を看板としており、地域研究型・専門学部隙間型・文理融合型の3種類に分けられる。徳島大学総合科学部はこの中の文理融合型でスタートし、現在は文系のみである。現在の総合科学部では共通教育で文理融合の教養を、さらに文系の基礎学力、専門の基礎知識、その上に専門をふまえた学際的知識を身につける。さらに総合の実践としてあるのが卒業研究だ。今までの当たり前に疑問を持ち幅広い視野で物事を見、その上で新しいものを生み出す柔軟性と創造性が総合科学の強みだ。基礎学力、総合的な発想力、柔軟性、創造性、これらが総合科学部で身につけるべきものである。

相手の話に耳を傾け相手を知り、自分が何者なのかをはっきりと話せる人物が社会に必要である。その基本を身につけるのが総合科学である。

総合科学部は文理融合をコンセプトに立ち上がった学部である。しかしなぜ国立大学の文系学部を廃止する案もある中で文系一筋に変わったのか。

今回の授業では「総合科学部」とはどのようなものかについて学んだ。私は総合科学部とは自分の興味のある分野を広く学べる学部であると考えていた。しかし実際には複数の学問分野を統合し、問題解決に役立てることがこの学部が目指していることなのだ。そのためにはすべての学問分野を極める必要はないが、自らの専門分野に閉じこもることなく、謙虚な姿勢で他分野のことも知ろうとする「教養人」としての姿勢が求められる。

私は今回の授業を受けてこれからは自分が受講している講義を単体でとらえるのではなく他の講義とのつながりも意識するようにしようと考えた。そして総合科学部で学ぶ心構えやどのような講義を履修するのか、ということにも深く影響するこの話題は、**新入生オリエンテーションのとき**に話してくれてよかったのではないだろうかとも考えた。

コメント [h37]: 平成28年度の改組で、総合科学部社会総合科学科はより社会的・文化的な課題を学際的・実践的な取組において扱うことになりました。その点で、新・総合科学部は、座学を中心とする文学部や法学部、経済学部などは理念やカリキュラム編成は異なります。

コメント [y38]: 入学式の後など、まだ大学生活の準備をしなければならない時期に講義を詰め込むのは好ましくないと考えています。

今回は総合科学部での学びについて学習した。まず、問題解決のための研究スタイルを学んだ。これには思考レベルと体験レベルの両方を必要とする w 型モデルというものがあった。次に総合科学部の在り方について学んだ。専門家は自分の研究分野については良く知っているが、それ以外は知らない。だから、彼らは知者ではない。広範囲の知識をもつ教養人こそが必要とされている。

私は、今日の社会において教養人が必要であるという意見に賛成だ。なぜなら、どんな仕事をするにしてもコミュニケーションを取ることは必要不可欠であり、自分の知識によってどのような話ができるのかが決まってくるからだ。もちろん、多くの知識を持っている人ほど幅広い分野の人々とコミュニケーションをとることができる。

交通事故死者数を調べ、グラフにした。減少傾向にあるのがよく分かった。「イヌにモーターツァルト」実験は妥当だ。なぜなら「BGM のテンポの違いが作業効率に与える影響」(阿部麻美、新垣紀子,「BGM のテンポの違いが作業効率に与える影響」成城大学大学院社会イノベーション研究科,5月1日,

http://www.jcss.gr.jp/meetings/jcss2010/pdf/JCSS2010_P3-47.pdf)とというものもあるからだ。人に対してもこのようなことが行われ、影響が出ることもあるのだからイヌに対しても影響が見られても不思議ではないのである。

今回の講義では、「総合科学とは何か」ということを学んだ。今回の講義でその全てが理解できたわけではないが、「特定の分野にとらわれずに学ぶ」、「違った分野を組み合わせせ学問を創造する」といったことを聞くと、自分の定めた目標を見失わないように、そしてより努力しようという気概が湧いてきた。

今回の講義で気になったことがある。配布資料やスライドなどを見ていると「真の教養人≠専門家」と受け取れる部分があるのだ。そのような意図はないのかもしれないが、専門家を「現代の最も野蛮な人間」と呼んだオルテガの資料を使ったあとに専門家に対する何のフォローもなく、すぐ後に「謙虚さや、学ぼうという姿勢、無知の知を自覚できたならば、総合科学部の学生なら真の教養人になれる!」とも取れるようなスライドが出てきたために、専門家を下げて総合科学部を上げているような印象を受けてしまった。「他の専門を尊重する」と記述したのであれば、講義中に専門家に対する何らかのフォローは必要だったのではないか。

今回の授業では、徳島大学総合科学部について学んだ。総合とはバラバラの寄せ集めで

コメント [h39]: 「キャリアプラン入門」の講義でも少し説明しましたが、コミュニケーションの中では、相手の話を聞く姿勢とともに、自分の考えを相手に伝える姿勢が必要です。学問（学術研究）も同じで、いろいろな論文を読んで特定課題についての幅広い知識・アプローチ法を身につけ、エビデンスに裏付けられた自分の結論を導き出し、それを相手に伝えることが求められます。

コメント [y40]: 内容でなく、実験手続きの妥当性について問題点を指摘してください。論文を確認したところ、「BGM 実験」はいちおう実験としての妥当な手続きを踏んでいるようですが、その結論は、BGM のテンポと計算やパソコンなどの作業とはほぼ無関係、歩く速さとは関係あるというものでした。「音楽によってイヌの性格が変わった」という主張とはまったく異なります。

コメント [y41]: 主観ではなく、客観的に根拠を示しながら問題点を指摘してください。

コメント [h42]: 専門家が客観的な裏付けに基づいて出した学術的な結論であっても、それが社会のニーズに応えられないケースがあります。総合科学的なアプローチ・視点を有する者であれば、社会的ニーズと学術的な結論とのギャップを説明できる可能性はあります。そうした意味での「教養人」が求められます。

はなく全体をまとめるという意味である。幅広い教養を学び、分野を超えて融合することで視野の広い考え方をすることができる。オルデガが言うようにある分野だけに詳しくほかは知らなく、他人の言葉に耳を傾けないのは真の教養人ではない。なぜなら、専門だけでは視点の違う考え方ができないからである。だから、自分の意見と違ってさまざまな意見を聞くことは大切であり自分もそうしていきたい。

今回の授業では総合科学部とはについて学習した。思考レベル、体験レベルを通して知識を収納していくことや、研究の手続き、論文の書き方を学んだ。

そして総合科学部は英語で **Integrate Arts and Sciences** といい総合性とは広い教養、分野を超えて融合するということを学んだ。私は総合科学部は何をやる場所なのか聞かれたことがあり答えに悩んでいた。しかし今回の授業を聞いて幅広く学びつつも詳しくつきつめて学ぶ部分もある。そして教養のある人になるために自分が知らないことに気づき自分の知識にしていくことが大切と分かった。また真の教養人は「他人の言葉に耳を貸す」謙虚さ、他人の専門を尊重することが大切。社会にでると人の意見を聞くことが大切になると思うのでしっかりと学習したい。また意見を聞いたあと自分が何者かを話せることが大事であることも学んだ。総合科学部入学したので今回学習したことを **大学生活に活かし**、社会に出る準備をしていきたい。

コメント [y43]: 具体的にどのように生かすのですか？

「専門家は自分が研究している分野に対してはよく知っているが、自分が研究している分野以外のことについては全くなにも知らないため、知者ではない」とあったが、専門家はその分野のことに対しては知識を多く持って統合させているのであれば、その分野における知者なのではないだろうか。どの分野においても詳しい知識を持っていなければ知者といえないのであれば、そのような膨大な知識を持っている人はとても限られているし、またそれぞれの違う分野の専門家同士で意見を交換することによって総合した知識をそれぞれが手に入れることができる可能性が広がってくる。そのため、科学が必要とする再編成のために必要としている総合への努力についてはそれぞれの分野専門の専門家が意見を出し合うことで近づいて行くことができる。

問題解決のための研究スタイルの部分では、書齋科学や野外科学などによって観察方法がわかれている構造を知ることができ、より細かく自分がしたい研究スタイルが具体化されたため、計画的に頑張っていきたい。

今回の授業では、総合科学部とは何かということで総合科学部の特徴について教わった。総合科学部は英語で **Faculty of Integrated Arts and Sciences** と言いその名の通り芸術や科

学、法学や経済など様々な分野について学べるという可能性の広がる学部である。そこが強みである一方、法学部や経済学部など専門の分野に特化して学んでいる人たちと比べると専門性に少し欠けるという弱みもあるとのことだった。

私は、総合科学部の強みは柔軟性と創造性を兼ね備えたグローバルな人材になることができるという意見に同意する。そう考えるのは、総合科学部では専門のことに特化するのではなく様々な分野について学ぶことで多角的に物事を捉えることができるようになり、幅広い視野をもち、柔軟で独創的な発想をすることができるようになるからである。

今回の授業では、総合科学部についてだった。医学部、法学部などは将来どうなるかどうなりたいか、何を学んでいるのかがわかりやすい。しかし、総合科学部とは何を指しどのような事を学ぶのか分かりにくい。総合科学部は英語で"**Faculty of Integrated Arts and Science**"という。様々な学問例えば語学や心理学などを全体にまとめた学部という事だ。

自分が興味がある学問を学べるからこそ、自分の将来像に合わせて何を学ぶのかを考えて学ばなくてはならない。総合科学部の良いところは、学ぶ学問を一つに絞らなくていいところだ。しかし、一般的に何をしている学部なのだろうと思われる。私も実際なにをするのと何度も聞かれた。

犬にモーツァルトという話も聞いた。どうしてこのような根拠の無い研究が論文になるのかと疑問だ。レポートや論文を書く時は根拠を示せと教えてもらったからこそ意味がわからなかった。今回の授業で紹介された授業レポートの「批判したり、されたりする覚悟」というのを持つべきだが根拠がないと批判されるのはどうなのだろうか。調べたことを本当に根拠があるのか何度も確かめるのはこのような論文にしないためなのだ。

コメント [y44]: 具体的にどのような点が問題なのか指摘してください。

今日の総合科学入門講座では、総合科学部の理念と学びについてお話をうかがった。私は幅広く様々な観点から見つめられることが総合科学部の長所だと入学する前から考えていたが、色々な要素を統合して新しいものを創造するところに意義があるのだときいて、考えを改めた。

ある特定の分野にとらわれるのではなく、幅広い教養をまず身につけることがまずは必要である。そしてその学んだ分野を組み合わせ、新しい学問を創造することが総合するということである。

確実な基礎と柔軟な発想を身につけるために柔軟に学ぶことが大切である。

3回目の講義は総合科学部についてだった。正直私は今まで総合科学部が何をやる学部な

のかと聞かれると、はっきりと答えることができなかつた。今回の講義で分かつたことは、総合科学部はある特定の分野にとらわれず幅広い教養を学び、分野を超えて融合することができる魅力的な学部であるということだ。英語では **Integrated Arts and Sciences** と表わされる。**Integrate** とは全体にまとめる、完成する、総和を示すなどの意味である。

他人の言葉に耳を貸す謙虚さや、知らないことを知り無知を自覚することは大切なことである。私はこの4年間、人との関わりを大切にしてお話をたくさん伺い、興味のあるものや知らないことをたくさん学び、学んだこと全てを将来に活かしていけるような生活を送りたい。この学部は他の学部とは違い、将来就きたい仕事ややりたいことを選択することができる。大学生活を通して自分のことをより詳しく知り、自分に合っている仕事は何なのかを模索していきたい。そして、社会において柔軟性や創造性はとても重要なものである。この2つの力を養っていきたい。

また、総合科学部では問題解決をする力も養われる。その力をつけるためには基礎知識を蓄え、情報収集することが大切になってくる。たくさん思考し、フィールドワークなどの体験することを通して身につけていきたい。

総合科学=特にこれといった専門性がないという認識で、縛りはないけれどこの先求められるであろう専門性は身に付かないのではと不安がありましたが、学際という言葉聞き、自分が総合科学部で何を学ぶべきかはっきりしました。また今回のお話からソクラテスの無知の知を連想しました。何を知っているからと驕らず、まずは謙虚な姿勢で自分を知り、そこから深めていくことが大事です。自分を知り相手を知ることは私の希望する進路にも深く関係してくるので特に意識し、さらに既成概念にとらわれない柔軟さを持ち勉学や仕事に活かすためにもまずは基礎を固めることに専念します。**柔軟性の認識に自信がない**のですが、既成概念にとらわれない=柔軟な発想=基礎を身につけているからこそ逆転の発想などができるという考え方でいいのでしょうか。

コメント [y45]: まずはたくさん知ることです。調べ、知り、書き、書き直す中で、柔軟性も身に付きます。

今回の総合科学入門講座では、「総合科学部」というものについてもう一度考え直すものであった。「総合科学」という専門分野は存在しないが、複雑化した現代社会の諸問題を解決するためにも既存の専門分野からのアプローチだけではなく、総合的な視点に立つ学術的・学融合的なアプローチが必要とされている。そうした新たなアプローチや新領域での教育・研究を総合科学部では行っている。また総合科学部というのは、ただ単に経済学や法学など様々な分野を寄せ集めたものではなく、総合とはいろいろな要素を融合して新しいものを創造(創生)することに意義がある、英語でいう〈**integration**〉であると学んだ。また徳島大学総合科学部では、専門的知識・スキルと社会的知識・スキルの修得を支えとし、グローバルな視点から地域を捉える能力、コーディネート・マネジメント能力、そして職

業的自立・社会的自立へという「学術」と「実践」の二本柱教育プログラム「II字型教育プログラム」というものをとっている。学び方としては、W型モデルというレポートでもいえる経験と思考を繰り返し社会的基礎力も養成できるようになっている。そして真の教養人になるためには、専門知識をあさる必要などなく自分の無知を自覚し幅広く学ぼうとすることが大切である。

今日の総合科学入門講座で、総合科学の原点に立ち返る為に”境界人(Marginal Man)”となり、柔軟性と創造性を身につける必要があると学んだ。

私は、この内容に賛成である。

人は物事を考えるときにそれに対する知識が無ければ、どうしても自分の感情思想で判断を下してしまう。

しかし、これでは真実にたどり着くことは出来ない。

ここで必要になってくるのが、知識と客観性である。

総合科学部では、1つの分野にとらわれる事なく、幅広い分野の基礎になる内容を学べるため、客観的に物事を見つめる力が他学部より身につく。

境界人の育成という総合科学部独自の方針をこれからも続けていくべきだ。

今回は総合科学部生としてこれから何を学んでいくべきかについて、平井先生からは課題解決のための考え方である発想法や、どのように課題を見つけ、取り組めば良いのかについて、荻森先生からは総合科学部の意味やその基盤にあるものは何なのか、また身につけるために必要な考え方について講義を受けた。

私は合格が決まってから、総合科学部で具体的にどんなことをするのか質問されたとき、授業で例が挙げたように、幅広く教養を身につけることができる、といったことしか説明できず、うまく答えることができなかった。しかし今回の講義で自分の答えが一方的だったことに気付かされた。幅広い分野を学び、そこから新しいものを作ること、無知を自覚し、学ぶという姿勢で、他から受け取った知識が自分のものになる。偏りの少ない目線で、異なる考え方をつなぐ橋渡しをすることができるという総合科学部の特性を活かし、幅広い教養をつけることを通じて柔軟な考え方を身につけていきたい。

「総合科学部」という学部について詳しく学んだ。

総合性には幅広い教養を身につける、分野を超えて融合するという二つの意味が込められている。専門主義には「ある特定の専門分野しか知らないのに、自分を知識人であるかのように錯覚してしまう」という、ある種の野蛮性がある。このような事態にならずに、

真の教養人となるためには「他人の意見に耳を貸す謙虚さ」「他の専門を尊重し、それについて学ぼうとする態度」「自分はすべてを知っているわけではない、知らないという自覚」が必要である。自分を知り相手を知る、その間に立ち橋渡しをする境界人(マージナルマン)は、国際人(グローバル人材)でもあり、そこには柔軟性と創造性が求められる。

総合科学部は幅広い分野を学べるという認識だけでなく、真の教養人となるための学部であるという認識をもつことでこれからの学びを有意義なものにできるのではないか。

総合科学部の「総合性」に込められた意味とは、分野にとらわれない幅広い教養を身に付け、異なった分野を組み合わせた学問を創造するということである。総合科学部の学生は教養人を目指し、無知を自覚し幅広く学ぼうとする態度を持つようにする。また既定の概念を疑い、幅広い視野でものを見て、新しいものを生み出せる、柔軟性と創造性を持つようになる努力をしていくべきである。

配布プリントの資料2に、「科学は自分自身の成長を有機的に調整するために、ときに再編成を必要とするからであり、そしてその再編成は、前に述べたように、総合への努力を必要としているからである。しかもこの仕事は、知識全体の広範な領域とますます関係を深めつつあり、日ごとに困難になっているのだ」(オルテガ『大衆の反逆』<原著一九三〇年 桑名一博訳 白水社版>)とある。

専門家ではない私たち総合科学部生は、細分化された専門科目を統合することができるよう、完璧でなくても幅広い知識を得、大きな視野で物事を見られるように、教養人としての力を身に付けなくてはならない。

今回の講義では、総合科学部という学部がどのような学部であるかについて学んだ。総合科学部を英語に直すと **Integrated arts and sciences** となる。**Integrated** は(各部分を)全体にまとめる、完全にするという意味である。したがって総合科学部というと多岐にわたって自分のしたいことを学ぶことができる学部であるという印象が強い。しかし実際には自分のしたいことを何でも学んでいくと方向性も決まらず一般教養から専門的な知識まで身に付けることはできない。そのため4年後のことも視野に入れ学ぶべきことを選ばなければならない。

総合科学という学問はないが、総合的な視点に立つ思考ができるようになるということは大事である。今、現代社会の諸課題は、社会が発展していくと共に複雑化が進行している。1つの専門分野をとことん追究していく姿勢も大事だ。だが、時には課題を解明していくためには物事を多面的に見る力が必要とされる。その力を養うためには、社会科学・人

文科学・自然科学、3つの分野の教養を身につけることが大事である。こうして養った力を上手く引き出せるよう、インターンシップなどの実践的な取り組みにも精力的に挑んでいきたい。

1. 授業のまとめ

総合科学部と聞くと、「幅広い、いろんな分野が集まっている、選択の幅が広く、何でもできそう」というイメージを持つ学生が多い。しかし、幅広い分野を学ぶことができること、様々な観点から物事を観ることができることが本当に「総合」なのだろうか。

総合科学部の英語名は、「Faculty of Integrated Arts and Sciences」である。その中の、「integrated」とは、どういう意味で、何をすることなのだろうか。

「integrate」にあたる「総合」と聞くと、バラバラの寄せ集めのようなものである。しかし、「integrate」の意味は、(各部分を)全体にまとめる、完全にすることである。すなわち、総合科学部とは、単に、様々な分野を寄せ集めて学ぶというのではなく、様々な分野を融合して新しいものを創造するというものである。

2. 授業に対する意見

この授業を受けるまでは、総合科学部は「幅広く学べる」というものであった。しかし、授業で、「幅広い分野の中から自分の学びたいものを選び、学ぶということではなく、自分の学びたい分野だけでなく、それ以外の分野も学び、新しいものを創造する」ということを聴き、学ぶ分野でないものにも関心を向けることが大切だと考えた。そして、他人の意見に耳を向けることができる「教養人」になりたい。

3. 前回の授業コメントの書き直し

論理的な文章を書くためには、「調べ、知り、書き、読み、書き直す」とことと「反復練習」が必要なので、前回の授業コメントでY先生のご指摘があった部分を「書き直し」を試みることにしました。

〈書き直し前〉

...『「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す≠頭の中で考える」は不適切である』という意見が多いものであった。

この不適切であるという意見に対して、私は賛成である。がしかし、反対でもある。まずは、賛成の意見から。「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」ことはレポートを書く上で重要なことである。その一番始めである「調べる」ためには頭の中で考えることが必要だからなのである。まず、「自分の論じるべき点を考えなければならない。その論じるべき点が自分の興味関心ではなく、社会的、学問的な点でなければならない。」”(「SIH道場第15回 学術的発想と書き方 総合科学部入門講座」裏面、【なぜ大部分が引用になってしまうのか?】、4月14日配布)と書いてある。調べるためには、何を論じるか考えなければならないのである。

〈書き直し後〉

...『「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す≠頭の中で考える」は不適切である』という意見が多いものであった。

この不適切であるという意見に対して、基本的には賛成である。だが、一部賛成できない点がある。

まずは、賛成の意見から。「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」ことはレポートを書く上で重要なことである。その一番始めである「調べる」ためには頭の中で考えることが必要だからなのである。まず、「自分の論じるべき点を発見しなければならない。その論じるべき点が自分の興味関心ではなく、社会的、学問的な点でなければならない」（「SIH道場第15回 学術的発想と書き方 総合科学部入門講座」裏面,【なぜ大部分が引用になってしまうのか?】,4月14日配布)と書いてある。調べるためには、自分の論じるべき点は何か頭の中で考え発見しなければならない。論じる点を発見したら、授業の中での「考える」すなわち「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」を実践するのである。授業の中での「考える」を実践するためには自分の論じるべき点を発見しなければならない。論じるべき点を発見するために頭の中で考えることが必要であると私は考える。

コメント [y46]: 頭のなかに、論じるべき点が入っているのですか?つまり、調べなくても、あらかじめ社会や学問についての知識が詰まっているのですか?最初に調べ始めるきっかけも、授業で聞いたなど、「知る」ことから始まります。

今回の講義は前回の内容の復習をし、総合科学部とは何かという説明だった。総合科学部とは英語で「Faculty of Integrated Arts and Sciences」だ。この「Integrated」は一つにまとめ完成させるという意味だ。総合とはいろいろな要素(幅広い教養及び知識)を融合して新しいものを創造する。しかし、幅広い教養又は知識を得ることは容易ではない。だから、分からないことを自覚し、それを知ろうとする謙虚な態度が必要である。総合科学の重要なキーワードは「境界人」だ。境界人とは「社会間距離を凝視しながら、二つの異文化社会の交錯をわが身のなかで、弁証法的統一を行なおうとする苦しい闘いに挑戦する存在なのだ。そういう意味において、世にいう『国際人』とは、まさに境界人的存在をさすべきものになりたい」(4/28 スライド)だ。そして、「国際人」とは「決して言わば脱日本人ではない。しばしば誤った主張としていい「骨を埋める」という人であってはならない。境界人とは、相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる人間である」(同上)だ。つまり、既定の概念を疑い、その間で考える。疑問を持ち、幅広い視野でものを見て、その上で新たなものを生み出す。すなわち、柔軟性と創造性が必要である。総合科学部では、この二点を培うことができる。ある特定の分野にとらわれずに学び、違った分野を組み合わせる新しいものを生み出す学部である。

総合科学部は幅広い教養を得ることができる。私は海外の人々の価値観について関心がある。それを知るためには、日本と海外を比較する必要がある。それは、前回の講義の葭森先生が述べられた「同じものを見ていても、ある人からは違うように見える」というように多角的に捉えなければ、海外の価値観が見えにくいからだ。そこで、私は異文化交流

から学ぶグローバル化という講義をとった。そこでは、留学生の方と話し合ったりして、異文化理解について学ぶことができる。異文化の価値観(自分の考えを明確に主張すること)に触れて、自文化の価値観(自分の考えを明確に主張しないこと)を認識できる。そして、総合科学部の強みである幅広く知識を得ることを利用することで、自分の関心へのアプローチの仕方の種類が多くなった。心理学を取れることで、恋愛における日本人と外国人の考え方の違いについて興味をもった。社会学が取れることで、互酬関係における日本と海外の違いはあるのかという疑問をもった。しかし、いくら幅広く学べるといっても一つにまとめ完成させなければならない。このことを忘れないようにすべきである。

質問です。4/30の22:00位からこのレポートに取り組みました。しかし、24:00過ぎに「中断」をして、始めようと思ったら、自分の打ったレポートが全て消えていました。日付をまたいで「中断」すると、打ったレポートは全て消えるシステムですか。

1、まとめ

今回は「総合科学」という分野についてキャリアプラン入門講座でおなじみの先生方から教えていただいた。

総合科学部は、なんでもできる学部、というわけではなく、幅広い教養をつけ、違う分野を組み合わせる新たな学問を想像するところである。また「幅広い教養をつける」というのは、なんでも知っていなければならないということではない。自分がほとんどのことを知らないということを知った上で多くの人の話に耳を傾けられる人のことを教養があるという。

人の話を聞き、自分が何者かを話せる技術は、日常から仕事までどんな分野でも必要となるものであり、総合科学部で努力すれば身につけられる力の一つである。

2、3、意見と感想とその理由

総合科学部って何するの?という問いは、私自身、入学以前から抱いていたものであり、多くの人から問われたものでもあったので、このタイミングで教えていただけてよかった。

先生の仕事を増やしてしまうようで申し訳ないが、学生としては、レポートが普通の出来の時には「ここをこうすればなお良い」、完璧の時には「他の学生はここを見習うべき」という点を示して欲しい。そうすれば自分の成長が感じられるだけでなく、他の学生のものより真剣に読むようになるので良いのではないかな。

今日は総合科学部の理念、研究や論文の書き方を学んだ。イヌにモーツァルトを聴かせると穏やかで安定した性格の子に育ったという論文が紹介され、会場で笑いが起きていた。この論文が世間でおかしな論文として扱われているのなら疑問はないのだが、もし認められている事実があるのなら、論文は根拠があって客観的であるはずなのにどうして認めら

コメント [y47]: 「中断」ボタンを押せば内容が保存されるはずですよ。

システムを管理しているセンターに問い合わせたところ、「中断ボタンを押したつもりで、押さないままでブラウザを閉じてしまったのではないかな」とのこと。

コメント [y48]: 世の中には「論文」と称するものが大量にあり、その大部分は、ほとんど誰にも読まれることなく消えていきます。

れているのだろうと疑問に思った。

今回の講座では総合科学部とは、総合科学とは、という極めて基本的なことではあるが、いざ考えてみると正しい答えを探してしまう総合科学部の意義について学んだ。総合科学部とは一体何なのか、実際に総合科学部に在籍しているのに今まで何度も問われてきたこの問いにきちんと答えられたことは一度もなかった。「総合科学部」と聞いて一番にイメージするのは「幅広い教養が身につく」、「違った分野を組み合わせることによる新しい学問の創造」の二点であり、それが「総合性」に込められている意味でもある。しかし、幅広い教養から幅広い知識を習得することは実質不可能である。「総合性」というものを曖昧に捉え、とりとめもなく日々統一性もない分野の授業を受けていれば、それはその分野の入り口に立っているだけの状態、自分の中にある知識はただの「雑学」である。雑学とは、雑多な知識の集合のことであり、集められた知識はお互いに関連性が希薄な事柄で、全体としてみて系統が立っていないものを指す。知識がそういう状態になっていることや、そのような形で知識を学ぶことを指すこともある。(Wikipedia『雑学』、<http://ja.m.wikipedia.org>、2014年6月10日)。

総合科学部で学ぶことの意義を知っておかなければ私たちがこれから学んでいく「知識」というものは、ひとつひとつは意味的なまとまりを持つ「知識」ではあるが、各分野においては学問を構成する知識のほんのごく一部でしかないものである。つまり、私たちがどれだけ「幅広く」学んだとしてもそれは学問を学んだということにはならないのである。

そのため私たちは「総合性」というものについて正しく理解しておかなければならない。オルテガの言う真の教養人としての「幅広く学ぶ」ということとは、「自分が無知であることを自覚して、幅広く学ぼうとする態度」である。一つの専門分野のみを極め、驕ってしまった知識人と、自分には知らないことがまだまだあるのだと自覚しながら多方面での知識を得ようとする知識人。私たち総合科学部生には後者のような知識に対する食欲さが期待され、そしてそれらを実行できるチャンスが与えられている。「幅広く学ぶこと」やそれにより得られる「様々な観点」は総合科学部におけるただの第一歩目としての単なる過程でしかなく、真に私たちが得なければならないものは「無知の知」から、「知識」を増やしながら自分の欲を体現する「学問」を創造する力である。

「総合科学部(Faculty of Integrated Arts and Sciences)」とは何を学ぶ学部であるのかについて今回は学んだ。

一般的に「総合」と聞けば、「あらゆる分野について幅広く学ぶ」学部であるというイメージを持たれてしまうが、あらゆる分野について学び、あらゆる専門分野に精通することなど出来ない。では総合科学部で学んで何をするのか。それは幅広く学び、それを融合し

て新しいものを想像する事である。新しいものを生み出さなければ、経済学部、医学部などといった専門性に富んだ学部の方が必要とされる。幅広く学ぶには、真の教養人とならなければならない。真の教養人とは「無知を自覚し幅広く学ぼうとする態度がある人」である。そしてそれは「自分を知り相手を知る、そしてその間の橋渡しをする」、つまり境界人である。「自分を知り、相手を知る」これはどの職業においても必要とされるものである。また、新しいものを生み出すには、「既定の概念を疑い、疑問を持ち幅広い視野でものを見る」柔軟性と創造性が必要である。

現在の日本では「総合科学部」というのはあまり普及している学部ではなく、就職の時に「総合科学部で何を学んだのか」と聞かれるので、総合科学部で柔軟性と創造性を豊かにし、この学部だからこそ身につけられた力をアピールできるよう、努力しなければならない。

今日は、総合科学部についての説明がありました。総合科学部は浅く広くという感じで勉強していきますが、これは専門性がないという点では弱点になりますが、たくさんを知っているという点では強みになるなど感じました。なぜなら、最近海外ではリベラルアーツと言われるようになっており様々なことに対して知識がある人が強いということを知りようになりました。ほかの学校にあるような文系学部とは違うからこそその強みを生かして自分の将来に向けて頑張っていく必要があります。これを強みにするか弱みにするかは自分の行動によってどれだけでも変わるということを学びました。

コメント [h49]: こうした認識を深めることが大事です。

今回の授業の目的は、主に総合科学部とはどのような学部なのかを知ることにあつた。

徳島大学を実験する前に総合科学部についてパンフレットやホームページなどを用いて詳しく調べたつもりだった。しかし、実際には学習プログラムや教育理念のごく一部しか理解しておらず、今回の授業を受けて初めて知ることの方が多かった。

私が徳島大学総合科学部のオープキャンパスに参加した際に、ガイダンスでお話しされた教員は「『総合科学部は何を学ぶ学部ですか』としばしば聞かれますが、総合科学部とは何でも学ぶことのできる学部です」と仰っていた。実際に入学してみて、高校とは異なる特色のある授業内容に楽しさを感じている。何でも学べる総合科学部の授業の中から専攻した学問を突き詰めることに他の学部にはない魅力を今回の授業で改めて感じた。

コメント [h50]: 大学の授業を楽しく感じてもらっていることは有り難いですが、そこから様々な問題意識の捉え方や研究アプローチのあり方について学ぶことが大事です。

今回の総合科学入門講座では、総合科学部での学びについて講義を受けた。この講義を受けるまでは、自分も総合科学部ならではの強みというものをはっきりと挙げることはできなかった。しかし今回の講義で、それは柔軟性と創造性であること、そしてさらなる進

化が必要であることが理解できた。幅広い視野で物事を考え新たなものを生み出すという総合科学の強みを念頭に置いておくことで、日々の授業や読書、レポート作成をより有意義にしなければならない。

今回はレポートの書き方について復習した後、総合科学部についての詳しいお話を聞いた。

一般的な総合科学部のイメージは、幅広いいろいろな分野を学ぶことができる。選択肢が広い。分野を超えて学ぶことができるなどが挙げられる。しかし、それが総合科学ではない。総合科学部は英語で Faculty of Integrated Arts and Sciences と表される。Integrated には各部分を全体にまとめる、完全にするという意味がある。ここでいう総合とはいろいろな要素を融合して新しいものを創造するということだ。総合性にこめられた意味は二つある。一つは特定の分野にとらわれず学ぶ幅広い教養。もう一つは違った分野を組み合わせることで学問を創造することだ。幅広い教養といってもすべての専門を確実に自分のものにするというのは総合科学では不可能に近いことだ。自分たちに求められている総合科学とは、国際関係、行政、経済、心理、教育などすべての基本を身につけるということだ。それがここでいう総合科学である。総合科学を学ぶにあたって必要なものは確実な基礎と柔軟な発想力であるということ学んだ。

今日の講義を受けて、自分は柔軟な発想力が欠けていると感じた。決められたこと、基礎は理解し学ぶことができるが、発想力がないため自分でアイデアなど提案することがとても苦手だ。しかし、大学で勉強するためには発想力が大事だということは実感している。そのため、この四年間総合科学部で勉強していくために発想力を身につけたいと思うが、どのようにして身につけたらよいのか、方法がわからない。また、他人に「総合科学部で勉強して何になるのか?」と聞かれたときにしっかり答えられるようにこれから自分の将来をしっかりと考え、四年間が有意義なものとなるようにしっかり勉強を頑張っていきたいと思った。

今回の講義では、初めに前回の講義の復習と授業コメントで質問されていたものについての答えについて聞き、次に問題解決のための発想法、総合科学部とはどういったものなのか、また、総合科学部の歴史について聞いた。

初めの復習のところでは私が抱いていた疑問についての回答はなかったものの、より深い質問の内容とその答えを聞いて、自分はまだまだ話をきちんと理解できていないから良い質問ができていないことが分かった。

また、総合科学部の話では、専門的なものにまだ縛られていないということに対して専門的なことを学んでいる人に比べると就職の時に不利にならないかという不安を持ってい

コメント [y51]: 大抵の疑問には答えはたは
ずですから、前回分の学生コメント一覧を
ご覧ください。

たのだが、柔軟性と創造性を持って課題研究に励むことでカバー出来ることが分かり、今後安心して幅広い領域の勉学に励める。

総合科学部の良さである幅広い分野の勉強ができることを十分に生かして自分の興味がある分野の教養を見つきたい。

今回の授業も前回の復習からスタートした。基本的には教科書で読んだ内容だったので良い復習の機会となった。その後総合科学部で学ぶことについての説明を受けた。問題提起を行い実際に調査し、得た結果をもとに課題について分析し仮説を立てさらに考えを深めていく。この思考と体験の両方の側面から考える発想法を「w型モデル」という。またこれを行う際にはワークショップなどのアクティブラーニングの手法を取るのが良い。またこのプロセスを4年間かけて実行して行きその集大成が卒業論文となる。よって常日頃自身が疑問に感じたことや気になることを放置せず書き留めておくなど押しておくのが良い。

続いて総合科学部そのものについての説明を受けた。医学部や法学部、経済学部などは名前を聞くと、何を勉強しているか何になるかがわかるが、総合科学部ではそうはならない。総合科学部と聞くと何か幅広い教養を身につけると考える人が多い。幅広い教養とは知らないことを自覚し、幅広く学ぼうとすることであり、それを兼ね備えた教養人とは「他人の言葉に耳を貸す謙虚さ」を持つ人のことを指す。しかしこの知識を求める謙虚さは日本社会で評価されにくいのが現状である。よって生き残るためには学祭性が必要である。そこで学祭性を追求した新構想学部の設立が求められた。3つのタイプに分類されるが、総合科学部は文理融合型に分類される。そして専門を踏まえた学祭知識をもつための学習を行う。そして卒業する際には「相手の話を聞き、自分が何者かを話せる」人材になることが求められる。

私自身も総合科学部は何をすることで聞かれ答えられなかった経験がある。国立大学や特に私立大学では環境・情報・福祉を融合した学部があるが何をするか理解度が低いように感じる。なので私たち自身が今後の行動でそれを示していく必要がある。

第3回の講義では「総合科学部の理念と学び」というテーマのもと、徳島大学総合科学部の教育理念や、問題解決のための研究方法と研究の手続き・論文の書き方についての話を受け、続いて総合科学部の意味や価値、またその方向性や強みについて学びました。具体的には、総合科学部の英語名は「Faculty of Integrated Arts and Science」であり、この「Integrated」つまり「総合」とは色々な要素を融合して新しいものを創造(創生)することであること、総合性にはある特定の分野にとらわれず学ぶ「幅広い教養」と、違った分野を組み合わせ学問を創造する「分野をこえた融合」という2つの意味があること、また「幅

コメント [h52]: 現代社会ではむしろ、こうした能力の方が強く求められています。

広い教養」とは何でも知っているということではなく、無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度であること、総合科学の強みとは「既定の概念を疑い、その間で考える。疑問を持ち、幅広い視野でものを見る。その上で新たなものを生み出す。」という柔軟性と創造性であること、そして確実な基礎と柔軟な発想により総合科学は身に付けられることを学習しました。

今まで私は自分の明確な進路を決めることができず、様々な分野について広く学ぶことができるため「総合科学部」への進学を決めたけれど、今回の講義を受け、幅広い知識とすべての分野について知っていることではなく、知識を求める謙虚さであることを学び、この4年間ではすべての分野を理解することを目的とするのではなく、他の文系学部に負けないよう、既定の概念を疑い、幅広い視野でものを見た上で新たなものを生み出す「柔軟性」と「創造性」という総合科学の強みを身につけることを目的として学習することが重要であると分かりました。

友人に学部を尋ねられて、総合科学部というと、「何をする学部なの?」といわれることがしばしばありました。自分自身も、実際総合科学部とは何をする学部なのかがよくわからないまま入学してきました。科学という言葉がつくと、なんだか理系中心の学部というイメージを抱いてしまいがちです。ただ、僕には「総合」という言葉の方が気になります。「総合的」のように、「総合」という言葉はしばしば使われることが多いです。しかしながら、「総合」という言葉の意味をしっかりと説明することは案外難しくありませんか。今までも「すべてのこと(もの)を総合的に総合して判断します。」といわれる、あるいは書かれていることが何度かありました。そのたびに、「総合的に判断」とは具体的にどういう判断の仕方なのだろうかとか疑問を抱いてきました。「総合」という言葉を具体的に説明するとすれば、どのようになるのでしょうか。

今回の授業では将来、総合科学部で学んだことをアピールするためにどういった視点で勉強に取り組むかなどを学んだ。総合科学部は経済学部、法学部、文学部などとは違い一般的に考えるとなにを学ぶか明確ではない。総合科学部の強みは幅広い学問を学ぶことができるということだ。この強みを生かすために大学四年間で論理的で根拠づいた考え方ができるような人材になっていくことが求められる。

就職活動、公務員試験のどちらを選択するにしても一年前からの準備が求められる。

就職活動のための企業合同説明会などでは常にメモを取る必要がありいつも誰かに見られているという意識を持つことも必要だ。

コメント [h53]: 授業では、特定課題・物事に対して一つの目線だけでなく、複数の多義的な視点やアプローチが必要であり、そこから得られた知識・結論を「統合する integrate」必要性が説明されましたが、それこそが「総合科学」といえます。単一目線ではなく、そうした統合して判断する能力を身につける必要があります。

今回の授業はこれまでの二回の授業とは異なり総合科学部での学びについてだった。私は徳島大学総合科学部に入学したのはよいが、総合科学というものがどのようなものなのかを全然理解していなかった。これからの大学四年間でどのように学んでいくと良いのかが分かり、とても有意義な時間だった。

先生は授業中に総合科学部の生徒は就職の際に総合科学とはどのようなものかを質問され、それが説明できず苦勞するとおっしゃっていたが、私はこれをポジティブに捉えたい。質問される内容が分かっているのならば、しっかりとした準備をすることができる。準備さえできていればしっかりと答えることができる。しっかりと答えることができれば好印象につながる。これは総合科学部の利点と言うことができるのではないだろうか。そのためにも今回の授業で学んだことを理解し自分のものにしていきたい。

今回の授業では、「総合科学部」は何を学ぶ学部なのかという話を聞いた。私自身、徳島大学の総合科学部に入学すると祖父などに話した時に何を学ぶ学部なのか聞かれて少し困った経験があった。だから、総合科学部について詳しく知ることができてとても勉強になった。「総合科学部」と聞くと幅広く様々な物事を学ぶという印象がある。しかし、多種多様に学ぶだけではなく、学んだことを枠組みを超えて融合し、新たなものを創造するための学部だと教わった。ただ、色々なことを学ぶだけではなく、自分で考えて何かを作り出すということはとても難しい。一つの考えに縛られることなく、別の視点からも物事を捉えられる力を身につけたい。

それと、「科学者」の話を通して、自分とは違う意見を受け入れる柔軟さも大切だと学んだ。自分の持つ知識を過信せず、人の意見にも耳を傾けて良いところはどんどんと吸収していけるように心がけたい。

前回の授業コメントは、期限を間違えてしまい提出することができなかったので、期限の確認と、早めに課題を提出することに気を付けます。

今回の講座では、卒業研究をするにあたって大切になってくる問題解決のための研究スタイルというものを学んだ。科学は、書斎科学、実験科学、野外科学という3つの種類に分別できるということを初めて知った。卒業研究だからといって今は全く関係ないと思うのはよくないことだ。卒業研究をスムーズに進めるためには、早くから関心のあるテーマを見つけて少しずつ資料を集めていったほうが良いに違いない。また、総合科学部とはどのような学部かということについても学んだ。総合科学部は、真の教養人となるため、自分を知り、相手を知り、柔軟性と創造性を身につける場所である。他人の言葉に耳を貸す謙虚さと無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度を大切に、真の教養人に近づけるように意識しながら、専門だけの道に進まなかった意味を理解し、この総合科学部という場で

学んでいきたい。

今回の講義の内容は、総合科学部の理念と学びについてである。総合科学部と言われても何を勉強しているのかわからない。学生には、幅広い、様々な観点を学ぶことができるというイメージを持たれている。しかし、幅広い、様々な観点を=なんでも知っている状態になることはできない。では、何を学ぶのか。真の教養人になるすべである。真の教養人とは無知を自覚し、幅広く学ぼうとする態度を持つ人のことだ。わからないことは聞き、学ぶ。そして、それが分かるのが総合科学部生だ。また、総合科学の強みは柔軟性と創造性。その原点は国際人になることである。国際人とは、自分を知り相手を知ることができる人だ。しかし、相手の話を聞き、自分が何者かを話せるのは国際関係だけではない。経済活動や臨床心理などに通じる、全ての基本である。つまり、総合科学を身につけるとは、確実な基礎と柔軟な発想を身につけることだ。そして、**学生に求められているのは進化であり、それは柔軟に学ぶことで身につけられる。**

コメント [h54]: 大事な姿勢です。

今回の講義では大きく 3 つのことを学んだ。一つ目は総合科学部についてのことだ。専門家、研究者といった「科学者」と呼ばれる人たちは実はそのほかのことについては全く知らない。彼らは知識ある科学者であっても、常識ある教養人ではない。また、地域研究と言われる分野が注目されたのは戦後、特に 1950 年代後半からのことだ。人文諸科学、言語学、社会諸科学の結合として地域学が現れている。2 つ目は研究スタイルについてだ。川喜田二郎氏の唱える W 型モデルにより書齋科学、実験科学、野外科学に分類されている。3 つ目は研究の手続き及び論文の書き方だ。1、2 年次は関心、テーマを広げ、3、4 年次には研究に取り組むようになる。今回、私は 1 つ目の内容のうちの科学者についての話は私も同意見だ。少し前も、とある研究者が他人の論文を自分の物のように扱い話題になった。このようなニュースを見ているとわかるが、どんなに深い知識があっても、常識も備わっているとは限らないのだ。

今回の講義では、総合科学部とはそもそもどういうものであるのかというこの学部の根底について学んだ。私は、先生に進められるがままにこの大学へと進学したため、総合科学部についての予備知識は全く言っていないほどなく、単位の取り方次第では教育免許が取れるということしか知らなかった。総合科学部の強みは「既定の概念を疑い、その間で考える。疑問を持ち、幅広い視野でものを見る その上で新たなものを生み出す。すなわち、柔軟性と創造性」(今回の授業 総合科学ってなんだろう スライドからの引用)とあったが、その強みである柔軟性と創造力をさらに伸ばすために**学外で**できることは何があるのか?また**中学・**

コメント [y55]: なんで「学外」限定なんですか?とりあえずできることは、「調べ、知り、書き、書き直す」ことの反復練習です。柔軟性や創造性は、豊かな知識と教養があってこそ身に付きます。

高校の教員を目指すにあたって柔軟性と創造性が生かせる場面にはなにかあるであろうか？
卒業後社会を担う一員になるにあたって上記の点が気になった。

今回の授業では、総合科学部がどのような学部なのかということを学んだ。総合科学部は、医学部、薬学部、法学部、文学部などの他の学部とは異なり、入学後すぐに職業が特定されるわけではい。つまり、職業選択の多くの可能性があるのである。また、総合科学部では、グローバル化していく社会を多面的に見て、積極的に社会問題解決に取り組む人材を育てている。グローバル化が進み、社会情勢が変化していく中、日本も大学機関を通して世界に通用するような人材を育成すべきだろう。故に、私はこれから、この学部で広い教養を身につけることを決心した。今回使用した資料には、専門家は客観的に見ると専門以外のことは何も知らない、と書いてあった。自分だけの考えに固執しては教養は得られない。広く人の意見を聞き、何事も多面的に見て、考えるべきだ。それを行うことが、この総合科学部に所属した私たちに課せられた課題である。

今回の授業では総合科学部について知ることができた。

世間の総合科学部の認知度が低いこと、ほかの学部と比べて総合科学部は何をすることでいいのか聞かれることが多いことを先生はおっしゃった。確かに私も最初に総合科学部と聞いたときは文系の学部だとは思わなかった。この点は長所でもあり短所でもある。ほかの学部では何をすることでいいのかを聞かれることはなかなかないので聞かれた際に自分が総合科学部で何を学び、何を掴んできたのかを話すことができる。逆に、遊んでばかりいて勉強を怠っていると、何をしてきたのかを話すときに言うことがなくて困ってしまう。そのため私たちは、総合科学部での4年間で多くの経験を積む必要がある。

また、総合科学部の特徴として将来性が多様であることがあげられる。法学部なら弁護士や公務員、文学部なら記者や出版業界などと学部によって将来の就職先が決まっていることがほとんどであるが、総合科学部と聞いて決まった就職先は思い浮かばない。広い視野で自分の将来を見ることができる。総合科学部でしかできないこと、枠にとらわれずに学ぶことを大切に4年間を過ごすべきである。

今回の講義では、卒業研究に向けてこれからどんなことをしていくべきか、そして、総合科学とは何かを学びました。私の通っていた高校は総合学科だったため、「一般的な教養だけでなく、専門的なことも学べ、幅広い分野の知識を身に付けることができる」というのが売りでした。私は、将来、英語を活かした職業に就きたいと考えています。ただ、具体的な職業がまだ決まっていないため、枠にはまらず様々な分野の教養を身に付けられる、

コメント [h56]: 中高教員には専門知識も求められますが、それ以上に教育者としての業務能力や社会性（生徒や保護者、地域との関係性など）が問われることになりま。そうした意味で、柔軟性や創造性が求められる総合科学的アプローチを身につけておくことは重要です。

徳島大学総合科学部は私に合っていると思い、受験しました。Wikipediaによると、総合科学部を置く日本の大学は、広島大学、徳島大学、山口大学、横浜市立大学の4大学しかないそうです。総合科学という学問自体、まだあまり浸透していないのだと思います。そこで、**山口先生に質問です**。先生の考える総合科学とは何ですか?また、メリットとデメリットは何だとお考えですか?

今日の授業は総合科学部についてのことだった。まずは総合科学部の理念と学びというタイトルで、問題解決のための研究スタイルや研究の手続きについての内容だった。ここでは、問題意識を持つにはまず知識を身につけることが大事であること、また研究課題についての仮説を立てて、その課題や仮説を明らかにするための証拠やデータを収集するために、実際に現地調査してみることも大事であるということ学んだ。

次に、総合科学部とは何かということについての内容だった。総合とは様々な要素を融合して、新しいものを創造することに意義があり、総合性には幅広い教養と、分野を超えて融合するという意味があるということ学んだ。また、幅広い知識というものは全て知っているということではなく、自分が「知らない」ということを自覚し、幅広く学ぼうとする努力であるということだった。わからないところは質問し、学び、自分の知識を増やすことが大事である。

授業の中で知識を求める謙虚さは社会では評価されず、就職試験では、専門内容について聞かれるため、幅広いだけでは生き残れないため「学際性」で勝負しなければならないという話があった。「学際性」とは何なのか授業を聞いてもよく分からなかった。「学際性」とはどういうことなのか教えて欲しい。

まだコメントを書く時に「思う」という言葉を書いてしまいそうになるので、「思う」ではなく「根拠」をきちんと書けるようにこれからも練習していきたい。

総合科学部といわれるとあまりピンとこない。実際私もその一人であった。そのため、入学するにあたり、総合科学部について少しだけ調べた。すると全国でも珍しい学部で、認知度がまだ低いことがわかった。入学した後、今回の授業を受けて総合科学部がどのような学部か深く理解することができた。それは、総合科学部とは、教養人=国際人を育てる学部であるということである。教養人=国際人とは、自分が無知であることを受け入れ、他人の言葉に耳をかし、自分と他人のことを知り、そして自分と他人もしくは他人と他人を橋渡しする存在である。異文化社会において、重要な橋渡しとなれた人こそが真の教養人もしくは、真の国際人といわれる存在となる。真の教養人・真の国際人になるためには、幅広い知識や教養を、分野を超えて理解し、様々な視点から物事を捉えることのできる柔軟な思考力が必要となってくる。幅広い知識や教養は一般教養を通じて身につけること

コメント [y57]: 今回の授業は平井先生と
葭森先生がメインキャストだったのですが、
ご指名なのでお答えします。できる限り広
い学識を持つことです。具体的には、これ
まで私の書いた本を読んでください。

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-ko>

kusai/members/yamaguchi.html#yamaguchibook1

が可能である。また柔らかな思考力は、各分野の研究や体験を通じて身につけることが可能である。私はこれから、自分の決めた進路を目指しつつ教養人=国際人となれるよう総合科学部で努力をしていく。

今回の授業では総合科学部の理念と学びについて学んだ。総合科学に含まれる総合という言葉の意味や、総合科学科について人々がどのようなイメージを持つのかについても学んだ。総合性には、幅広い教養や特定の分野に囚われずに学ぶという意味や、違う分野に組み合わせて学問を想像するという意味が込められており、それこそが総合科学部の強みである。つまり、幅広い視野で物事を見て、そこから新たなものを生み出すことができる柔軟性や創造性を持っていることが総合科学部の強みなのである。しかし、総合科学部に在籍しているからといって、そのような能力が鍛えられるというわけではない。在籍している間に、確実に基礎能力を積み上げて、柔軟な発想ができる人材になることが重要なのである。自分自身が新たな自分へと進化していくことができれば、柔軟に学んでいくことができれば、自ずと総合科学を身につけていくことができる。

今回の授業は、最初に前回までの復習テストや学生コメントへの応答をしてから、総合科学について学んだ。総合科学部は英語名で、**Faculty of Integrated Arts and Sciences** と表し、**Integrated** は総合するという意味があることを学んだ。総合科学部学生には、常識にとらわれない柔軟性と創造性を持った国際人になることを求められていると知った。国際人とは、ただ単に外国語を話すことができる人ということではなく、相手の話を聞き、自分が何者なのかを話すことができる人であるということ学んだ。総合科学部は他の学部と比べて、学部名だけでは何を学ぶ学部かは分かりにくいし、もしかしたら就職などの面接時に学部についての説明や入学した理由も求められるかもしれない。まだ今の私には専門は何かと聞かれても具体的に答えることはできない。しかし、これから4年間の大学生活を経て、総合科学部だけにしかできない新たな分野の研究をし、専門は何かと聞かれた時に自信を持って答えることができるようになりたい。そのために私たちは幅広い知識を学ぶだけでなく、アルバイトやサークル活動などにも参加してより多くの人と交流し、自分だけでは思いつかないことにも積極的に目を向けていくべきだ。

今回の講義の内容は、前回同様研究の手続きや論文の書き方に加え、総合科学部での学びの方針や理念についてであった。

今回の講義を通して私は自分の学部に対する認識の甘さを実感した。「幅広い教養を備え、分野を超えて融合していける人材の育成」。という原点に対して、私は「思考や体験的学習

を通して多面的な視野や経験を育てていく」と捉えた。今回の講義を踏まえて、野蛮な専門家ではなく様々な分野の架け橋となれる「境界人」を目指し学んでいきたい。

総合科学部についてはセンターが終わるまで知らなかった。(総合とついているのだからなんでも、幅広い分野について学ぶことができるのだろう。将来自分がなにをしたいのかが決まっていなくて人たちにびったりな学部なんだろう。)と思った記憶がある。「専門主義の野蛮性」の資料をこの授業で読んだ。「専門家は知者ではない。自分の専門以外のことはまったく何も知らないからである」という所が目にとまった。なるほどなと思った。例えば経済学部の人には経済については詳しくまなび、経済の専門家になれるかもしれない。だが理工学については何も知らない。まだいまいち総合科学部で何を学ぶか決まっていなくて、早く決めていきたい。

総合科学部についての講義を受けた。

総合科学部では様々な分野を学ぶことが出来、幅広い教養を得ることが出来る。

私は将来の夢がはっきりと決まっていなくて。

この総合科学部を志望したのも、様々な分野について学び、自分の興味、関心があることを見つけ、進路を考えたい、と思ったからである。

四年間の大学生活の中で色々な経験を積もうと考えている。

まず私は留学をしようと考えている。

語学の勉強の為だけでなく、文化の異なる人の考えや、コミュニケーションの取り方などを学びたい。

幅広い分野を学ぶことで、幅広い視野で物事を見られるようになる。

そして新しいものを生み出す。発想することが出来る。

発想するのに必要な能力、柔軟性と創造性。

この二つの能力を総合科学部で身に付けたい。

今回の授業では少し引用の復習をした後に、総合科学部について説明を受けた。具体的に、「専門主義」の野蛮性・国立大学新構想学部の歩み・「地球研究とは何か」・「接近」の達成・発想法・研究の手続き/論文の書き方に分けて学んだ。総合科学部を英語に訳すと、**total science** と推測していたが、「**Integrated Arts and Sciences**」ということを知った。**integrate**には集約するのほかに積分するという意味があるそうだ。また、発想法と研究の手続き/論文の書き方については、具体的な図が記されておりわかりやすかった。

今日の講義は、総合科学部についての内容であった。まず、総合科学部は英語名表記だと「Faculty of Integrated Arts and Sciences」となるということを学んだ。そして次に、総合科学部は法学部や経済学部や教育学部と違い、何を専門として学んだかが外部の人間からは分からない為、専門性のある学部よりも多かれ少なかれハンディを背負っていると教わった。確かに、就職などにおいて何をしたか分からなければ不利であるし、もし私が面接官ならば専門性のないよく分からない学部の就活生には興味を持たないだろう。だからこそ、これから大学生活を送っていく中で、何を専門に学んだか、どのような意識で過ごしてきたか、等をはっきりと理解していくことが重要なのだと考えた。その後は、徳島大学総合科学部が何年に誕生したのかということや、マージナルマンを目指そうということ学んだ。

しかし、私が今日の講義を受けて最も学んだことは、この総合科学部のことを何も知らないという現状だった。総合科学部に在籍してしまっている以上、胸を張ってこのような学部であると説明できるように、これから学んでいきたい。

私が徳島大学総合科学部へ進もうと決めたのは、受験が迫るセンター試験後だった。正直なところ、第一志望の大学ではないがここに来られて良かった。「総合科学」という本当の意味を遅かれとも知ることができたからである。もし自分の願うように進んでいたなら、私は成功の余韻に浸り、勉学だって疎かになっていただろう。こんなことを考えながら、今回の講義を受けていた。

他の文系学部、例えば教育、経済、法文、人文学部などの目指す先にあるものは、学者、教員など、ある程度決まった幅がある。しかし、総合科学部には、理系学部の進学先を除けばほぼ全てが対象となりうる。そのような境遇にいる私たちが得られるものというのは、技術、学術といったものではなく、かつての日本になかった柔軟性に加え、創造性である。つまり、自分と相手、正と反を全部とは言わず理解し、両者納得のいく新たな号を生み出す力を身につけられる。

そうはいっても、そこへ至る道は険しい。以前に白人が黒人を軽蔑していたように、戦争や紛争が絶えないように、我々人間はうまく「異人」（ここでは、各個人の所属する集団とは異なる見た目、文化を持つ存在を言う）と付き合っていけない。恐らくは、これから先もそうだろう。対立の中、一度は異なる人たちの意を受け入れ、相手も自分も多少なり変わっていくことの繰り返しで、少しずつ互いに向き合っていく。柔軟な思考力がなければできないことだ。そしてこの能力は、若いうちにしか身につかない。失敗を避けて通らず、困難を前にどうやって乗り越えるかをあれこれと思案、実践していくことが、いちばんの近道なのだ。

「終わり良ければすべてよし」ではなく、終わりまでの過程に目を向け、大学生活を有

意義なものにすることを私は目的とする。

今回の授業を受け、ソクラテスの「無知の知」を思い出した。私は見識を深め広げるために総合科学部を利用しようと考え徳島大学に進学した。私は何も知らない。その自覚は学ぼうとする意志になったということを私は経験している。自分が全てを知っているというのは驕りだ。

また、無知を自覚し幅広く学ぼうとする教養人は、既定の概念を疑い異なる存在をよく理解しようと努め行動する境界人そのものだ。自身の狭い視野に閉じこもるだけでは、他者のことはおろか、自身のことさえ見ることができない人間になるだろう。それが、自身の無知を自覚できないということだ。

今回の講義では、徳島大学総合科学部について学びました。入学する以前から総合科学部のサイトを見たことはありましたが、教育理念については正直知りませんでした。私はこれから徳島大学総合科学部に4年間在籍し、その中で国際人になれるような準備をしていきたいと思いました。国際人とは自分を知り、相手を知ってから、その間に立って橋渡しをする人材のようです。そのためにまず自分を知ることが必要となってきます。だから私はできるだけ多くの人と対話しようと考えています。その目的は様々な考え方を身につけるためです。多くの考え方や知識を身につける中で自分のことがよく分かると思います。そうして自分のことを相手に話すことができるようになっていきたいです。

今回の講義では総合科学部の意味やW型の発想法などについて学んだ。私はその中で、総合科学部のリスクとして挙げられた、周囲の認知度の低さ、就職の際に問われる専門性の件についての話が一番心に残っているが、一方、疑問も残っている。

勿論、専門的な内容を修めている方が就職時に強いかもしれないが、就職後、問題に直面した際に総合科学部で得た多面的な視点から物事をみる力は活かせる。

それゆえ、就職に向けて努力をすることで総合科学部に来た意味があるだろうし、それをリスクに感じることもないからだ。

今回の講義で総合科学部は英語でどう言うか聞かれた時頭の中で考えてみましたが全然思いつかず、総合科学部に所属するのに英語名を考えたことはないことに気づきました。また、何学部を受験するのかと聞かれ総合科学部と答えると大体の人が化学と間違えて捉え総合科学部の世間の認知度は低いことを実感していました。

コメント [h58]: 社会人基礎力でもそうですが、単眼的・単一的な視点をもつ人材よりも、多義的に物事を捉えることの人材が求められています。

総合科学とはまず様々な分野に触れることによって情報を集め、総合的にものごとを知る。そして集めたものを統合する学部であると学んだ。つまり一つの分野に留まらず、分野を超えて融合し、新しい分野を想像するということだ。

総合科学のことについて詳しく聞いたが、これから新しい分野を創造していく自分をイメージできなかった。また、新しい分野を創造することだけが総合科学がすることではないので、新しい分野に固執しすぎず幅広い教養を活かし、これから大学生活で何をするかのビジョンを持てるようにしていきたい。

～総合科学部の使命と役割～

専門家とは、その名の通りある分野に突出した知識を持ち、それに精通している人のことを指す。しかし裏を返すとその他の分野では凡人並みの知識しか持ち合わせていないことになる。それでも新しい事実を発見することで社会貢献してきた。では総合科学における専門家はどのような人であろうか。それは、一部ではなく幅広い知識を身につけた教養人である。

就職活動の面接において、「総合科学部で何を学んだのですか?」と聞かれたら、私なら、「法学経済学経営学と幅広い教養を身につけた上で、政治学を専攻しました。」と答える。

ここで疑問が生じる。世の中には賢い人は5万といて、そんな彼らでも全てを極めることはできず、一つの分野を特化させる道を選んだ。ならば多くの知識をバランスよく身につけた人間はバランスが良い。しかし新しい発見をしようとしたり、専門家と同じ分野で勝負したら勝てるのだろうか。

私の結論はこうである。研究者、ノーベル賞を狙うような人は専門家になるべきである。ただ将来一般企業に入社して社会貢献しようと思うなら、バランスのとれたあらゆる分野に適応力のある教養人が重宝される。「企業では専門知識を持つ人より広い知識を持つジェネラリストや社会性・人間性に優れている人を求めている。」と先週の「キャリアプラン入門」で言っていたはずである。

論文を書くにあたって、思考レベルと体験レベルの2つが存在する。思考レベルには、一番初めに行う問題提起や課題分析などがあり、体験レベルには、その問題に対する野外観察や実験観察などがある。これらの作業を繰り返し行い、文章にまとめていくことで論文は完成する。

総合科学部では、専門主義な人は、科学者ではあっても教養人ではないため、自分が無知であることを自覚し、知的好奇心を養い、わからないことがあれば人に聞くことができ

コメント [y59]: ごまん

コメント [h60]: もちろん、モノづくりなどに貢献できるスペシャリストも世の中には必要ですが、複雑で多義的な「社会」をコーディネートできる人材も広く求められています。

る人材を作ろうとしている。

自分が無知であると自覚することは、自分をより高めるためには欠かせないことである。なぜなら、一度自分には知識があると思いついてしまうと驕りが生まれてしまい、自分の知的好奇心が育まれないからである。だからこそ、自分が無知であることを自覚し、より多くの知識を求め、自分の糧にしていくことが大切である。

今回の総合科学部入門講座では、総合科学部とは何かということを教えていただいた。まず、科学者は近代が生んだ奇妙な人間であるという定義が興味深かった。科学者と言えば私たちのように普通に生活をしていると知らないこと(専門知識)をたくさん知っているというイメージだった。しかし専門知識だけでは自らが傲慢になるきっかけということを知った。謙虚や学びに対する意欲、無知であることの自覚などを持ち多角的に物事を調べる必要がある。そのためにも普段から新聞やニュース等をチェックし、色々な事に関心を持つことが就職活動に役に立つのだろう。

今回の授業では、まずは前回の授業の復習から始まり、次に「総合科学部の理念」と学び、そして最後に「総合科学とは何か」、について学習した。特に「総合科学とは何か」では、総合性には、二つの意味「幅広い教養」「分野を超えて融合する」が込められていることを学んだ。また、専門家と教養人についても学んだ。専門家は、ある一部分に対し専門的な知識を持つが、他の分野の知識を認めたり学んだりせず、自身が専門的知識を持っているがゆえに知識人と錯覚してしまう人もいる。反対に教養人は自身の無知を知り、知らないことは積極的に学んでいく人々のことである。

私は、総合科学部は、分野を超えて幅広い勉強ができる場所、というイメージをずっと持っていた。しかし総合とは、様々なものを融合して新しいものを創造していくことに意義があるのであって、幅広いことがそのまま総合科学部なのでは決してない。総合科学部で学ぶことによって、傲慢な専門家ではなく、自らの無知を自覚し、謙虚に学ぶ教養人として、柔軟性と創造性を養っていく事が大切である。

今回の授業では、徳島大学総合科学部について深く知った。私は、総合科学部に入学し、授業や部活動、ボランティア活動などの大学生活を通して将来やりたい仕事を見つけようとしている。私は人を楽しませることが好きだ。好きなものを仕事にしたい。だから、フィールドワークでコミュニケーションを取ったり、メディアや情報発信について学べる地域創生コースへ進みたいと考えるようになってきた。まだ漠然としているが、やりたいことが見つかれば、この学部に入籍して正解だった。

コメント [h61]: まずは、課題解決に向けて先行研究に基づいて自分で論理的に考え、様々な方法を試みる姿勢が必要です。それで解決が難しければ、コミュニケーション行為などを通じて他人の知恵を借りることになります。

今回の授業の内容は、総合科学部についてだった。

総合科学部は一般的なイメージとして、色んなことが幅広く学べる。視野が広がる。などがあるが、それなら、総合科学部で様々な分野における専門的な知識が身につくのか？とゆうことになる。

私は、そうすることは不可能であり、また必要無いとゆう意見に賛同する。

この世のあらゆる分野に専門的に精通した天才などそう滅多にあるものではなく、科学者たちは何らかの専門家であると同時に他のほとんどの分野に関しては素人であるからである。

だからと言って、どの分野も無知です。とゆう行き過ぎた謙虚さも就職活動では、あだとなる。

我々は無知ではなく、学際がなければいけない。これこそが、専門分野以外に対する傲慢な態度を避け、選択肢を広げる原点となるからである。

コメント [h62]: 「ゆう」ではなく、「いう(言う)」です。

コメント [h63]: 大学では問題関心(事)への理解を深め、その解決に向けてのアプローチ法を考えてみてください。

今回の授業は、研究の手続き・論文の書き方、総合科学部について学んだ。

研究の手続きは、問題意識・関心テーマの確立をはじめとし、関連文献の収集・整理、先行研究動向の整理、仮設の構築、分析指標とそれを明らかにするための証拠やデータ収集、分析指標の検証、オリジナルデータの構築、検証結果、仮説の検証、そして再調査・再分析という多くの手順をふまなくてはならない。最終的に卒業論文で上記の手続きを文章化して説明する。

論文は1 問題提起・研究課題 2 研究手法・仮説立案 3 本論(調査・実験・分析) 4 結論・課題の順で書くとよい。

総合科学部は専門という専門がない学部だ。だから専門を聞かれる就職面接では困ってしまうことが多い。しかし、総合科学部のいいところは専門にとらわれず幅広い教養を学べ、謙虚さ・学ぼうとする態度・知らないという自覚を持つ人材を育成できることである。自分の専門以外のことを全く知らない人は知者とはいえない。わたしはここでしっかりと学び、四年後の卒業時には柔軟性と創造性を持ち合わせた立派な教養人でありたい。

今回の講義では、総合科学部での問題解決のための研究スタイルや、論文の書き方、総合科学という学問についての話があった。重要な点は、2つある。まず1つ目は、論文を書く際は、1 問題提起・研究課題 2 研究手法・仮説立案 3 本論(調査・実験・分析) 4 結論・課題の順序に沿って書くということである。しかし、その書き方が簡単に身につくわけではないから、大学の4年間で何度も反復練習して上達させていく必要がある。2つ目は、総合

科学とは、ある特定の分野にとらわれずに学び、分野を超えて融合し学問を創造するということである。幅広い教養というのは、なんでも知っていることではなく、無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度を指す。また、疑問を持ち、幅広い視野でものを見て新たなものを生み出していくということで、柔軟性と創造性が必要となる。

これから先、就職活動をしたり公務員や教員などの採用試験を受験したりする際に、必ず「専門分野は何か?」ということ聞かれるだろう。その中で、総合科学とは何なのか、専門は何なのか、を相手に理解してもらうために、まずは自分自身が詳しく総合科学について知るべきだ。また、総合科学部では幅広い教養を身につけていくため、専門分野を扱う法学部や経済学部、医学部などに比べ、専門性については説明し難い。しかし、はっきりとした専門がないとしても総合科学部でしかできないこともある。たとえば、文理を融合させた学問を学ぶことだ。これからの学生生活を通して、総合科学のことや専門性を理解し、自分自身も納得し、他人にも納得してもらえるような説明ができるようになりたい。

1 句点(丸)の正しい打ち方は恥ずかしながら初めて知った。今まで何気なくカッコ内に打っていたので、今度から気を付ける。また、世の中にはトンデモ本というもの存在しており、著書だからといって安易に信じてはいけない。普段はなんとなく読み流していた最後のページの著者紹介の欄にしっかり目を通した上で、Web で名前を検索するようにした方がよい。きちんと調べてから、「~を行っている・・・の」と前置きをして引用部分を入力するようにすれば、読む相手に引用してきた内容をどのような人物が書いているのか分かりやすい。引用する際には敬称は不要であるが、つけるように決まっている学問もあるので、教員から指示があった場合はつけること。そして、レポートを書く上で重要なテーマを示すタイトルは最後に書く」と良い。レポートを書いているうちに様々な情報が集まってきて、内容が固まってくると、それに伴って相応しい題名が見えてくるからである。また、そのテーマを選んだ理由を示すことが必要。個人の思いを書くのではなく、「学問的・社会的に問題になっていること、学問的・社会的に論じるべきこと」について書くように。

2 イヌにモーツァルトの実験は妥当ではない。

3 三匹のイヌに試したからといって断言できるものではない。しっかりとした実験として扱い、結果を記録するのであれば最低でも十四に試した方がよい。三匹だけの実験だと、音楽を聞かせる前からそのような性格だったのでないかと言われても仕方がないし、なにより証拠としては不十分である。生後何か月というのと、種類によっては大人しい犬種だったり活発で行動的な犬種だったり元々の性格に違いがあるので、犬種も統一した方がよい。

今回の授業では、なぜ徳島大学に経済学部や法学部などではない、総合科学部があるこ

コメント [y64]: 原稿用紙なら、カギカッコと。を同じマスに打てるのですが、活字ではそれができないのです。

コメント [y65]: 決める

コメント [y66]: 「十四」の根拠は?

とについて勉強になった。以前、私は総合科学部とは分野が違う学部をまとめた学部だと理解した。それに、総合学部では、幅広いことを勉強して、あまり深く研究しないとおもった。しかし、そうではなかった、総合科学部では、文系や理系は関係なく、知らないことを勉強しろというが、**学部**だ。

今回の授業では、総合科学部がどう**ゆう**ものなのかというのを学んだ。

その中で総合的に物事を判断する力を身につけることが大切であり今後の社会には必要である。しかし、残念ながら現在の日本では専門的な分野に特化していることのほうが高く評価される。とおっしゃっていて、全くそうだなと思った。何かの解決策を考える上では総合的に判断することが大切であり一部の偏った知識による判断はリスクが大きい。私は、税制について特に興味をもっており**税制の問題点を考えたい**と思っている。その解決にはやはり広い知識と技能をもつのがまずは必要だと考え総合科学部に進学した。今回の講義でより自分の選択に自信を持ち、今後の四年間への意欲が強まった。

授業の序盤のプリントが無かったので話が**頭に入りにくかった**。地元にある国立大学という理由で徳島大学に入学しあまり総合科学部について詳しく知らなかったのでおの学部での目的や由来などを知ることが出来た。卒論をきちんとかけるように**一年生から基礎を積み重ねていく**。

今回の授業では総合科学部としての自分の存在を強く意識させられる授業であった。特に「境界人」についてだ。境界人とは、「相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる人間」また、「社会間距離を凝視しながら、二つの異文化社会の交錯をわが身のなかで、弁証法的統一を行おうとする苦しい闘いに挑戦する存在」(阿部利夫、『外国学ことはじめ』、総合科学入門講座、4月28日配布プリント)である。そしてそんな境界人が今の社会には求められている。しかし、多くの人間は何をするにもある特定の集団に属し、その集団に執着したがる。自分の居場所を必死になって確保し、守ろうとする。他人の目を気にかけ、孤独でない自分をアピールするためだ。しかし、それでは他人の社会は愚か、自分の社会や自分を知ることすら不可能である。なぜなら、自分を知ること自分客観視することから始まり、集団の本質を見るには他の集団からその集団を見ることが必須であり、特定の集団に属していれば本質を見ることは出来ないからである。境界人となることは、自分を知り、相手を知ること、そしてその間に立って橋渡しをする人のことである。境界人は自分で自分を成長させることが出来るとともに相手や集団を向上させることも出来るのだ。どんな分野においても自分を知り、相手から学ばなければある一定

コメント [h67]: 社会現象や文化事象に対して問題意識を持ち、その解決に向けての論理的で実証的な研究アプローチ法を身につけてください。

コメント [h68]: 「いう」

コメント [h69]: 明確な問題意識をもつことは大事なことです。そうした自己意識が何にもとづくものなのか、これまでの研究ではそうした問題がどう扱われてきたかをまずは整理・勉強してみてください。

コメント [y70]: ウェブページを活用してしっかり復習してください。

コメント [y71]: そのためには、「調べ、知り、書き、書き直す」ことの反復練習が必要です。このコメントは短すぎて、練習になっていません。

以上からの成長は出来ない。したがって、本当に求められているものは境界人的要素なのである。

今回の授業では、総合科学部とは何かについてと、総合科学部の理念と学びについて学習した。

総合科学部には、幅広い教養について学ぶことができ何にでもなれるというイメージがある。しかし、幅広い=総合でない。総合とはいろいろな要素を融合して新しいものを作り出すことに意義がある。総合科学部において必要とされる幅広い教養とは、無知を自覚し学ぼうとする態度を理解することである。

しかし、それだけでは不十分である。社会で生き残っていくためには、柔軟性や独創性を身につけ、相手の話を聞き自分が何者か話せる国際人にならなくてはならない。これは国際関係だけでなく心理や経済、教育の現場などすべての基礎であり、これを身につけることが出来るのが総合科学である。それを身につけるために私たちは積極的に学んでいかなければならない。

総合科学部について学んだ。経済、法学、医学部などと異なり総合科学部は何を学ぶか、何になるか問われることが多い。そこで総合科学部である以上理解をしておかなければならない。英語名は大学ごとに異なり徳島大学は **Faculty of Integrated Arts and Science** である。全体的な知識を高めるため、学際的に学び他人の言葉に耳を課す謙虚さを持ち無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度が大切だ。また前半の講義の思考レベルと経験レベルを織り交ぜた発想法は問題解決のためにはなくてはならない。そもそも論文とは問いと答えがと論拠がそろって文章だ。どちらか一方だけだと説得力が欠け、読み手が納得する文が書けない。

大学に進学してから総合科学部って何になるところ?やなんの勉強するところ?と聞かれたことがあり、答えるのが難しいと思ったことがありました。今回の授業でどう答えるべきかがわかりました。

レポートの話で質問があります。引用の出典は引用のすぐあとに書くべきで「すか?」文章が終わり最後にまとめて書くべきですか?

コメント [y72]: 教科書 17 ページを読んでください。

今回の授業では、総合科学部という名前の由来や意味、そこで必要とされる能力を教わった。受験の面接の際に、志望理由として幅広い視野を身につけたいということを面接官

に述べたが、「総合」というのは幅広いという意味がメインではなく、まとめるという意味がメインであり、それを実行するための謙虚さや学ぼうとする態度、知らないという自覚などが必要であるので、それを身につけるためにすべての基本を学ぶのが総合科学部であるということ学んだ。

オルテガは『大衆の反逆』で「きわめて奇妙な人間の一種族」と述べているが、なぜ奇妙と表現したのだろうか。専門知識はあってもそれ以外は知らないのに知識人と勘違いしているなら愚かであって奇妙とは少し違うのではないだろうか。(319文字)

コメント [y73]: 該当箇所を読んでみて、前後の文脈から考えてみよう。

今回の講義では、総合科学とは何かということについて考えた。幅広く特定の分野に限らず学ぶこと、違った分野を組み合わせ新しいものを創造することが総合性に込められた意味であると学んだ。しかし、幅広い分野を学ぶといっても、その一つ一つの分野において、より知識を増やし、考えを深めようとするのはなかなか難しいことである。そこで私たちがすべきことは、多くの分野を学ぶ中で、その分多くのものの見方を身につけることである。この幅広い学びから得たものによって、私たちは専門的な他学部の生徒よりも物事を多方面から見ること、考えることができるはずである。そうであるように努力しなければならない。それこそが総合科学部の強みであり、学びの先にある、新しいものを創造するための力となる。

コメント [h74]: 大事な姿勢です。

初めに、前回の復習や生徒のコメントに対しての答えなどがあった。

次に「総合科学部とは」ということについてだった。専門家は、自分の専門以外のことを全く何も知らないので知者ではない。と言っても、彼らは「科学者」であり、彼が専門にしている宇宙の小部分については大変よく知っているので、無知な人間でもない。これは極めて重要なことである。というのは、そうした人間は自分が知らないあらゆる問題についても、無知者として振舞わずに、自分の専門分野で知者である人がもつ、あの傲慢さで臨むことを意味しているからである。文明が彼を専門家に仕立て上げた時、彼を自分の限界内に閉じこもり、そこで満足しきる人間にしてしまったのだ。しかし彼の心のうちにあるこの自己満足と、自分は有能だという感情は、彼を専門外の分野をも支配したいという気持ちに導くだろう。大衆人の特徴として述べてきた「他人の言葉に耳を傾けない」、「より高度の審判に従わない」という性向は、ほかでもなく、部分的資質を持ったこれらの人々においてその極に達しているのだ。彼は今日の大衆支配を象徴すると共に、その大部分を構成している。彼らの野蛮性こそがヨーロッパの墮落の最も直接的な原因になっている。科学は自分自身の成長を有機的に調整するために、ときに再編成する必要とするからであり、そしてその再編成は、前に述べたように、総合への努力を必要とするからである。

コメント [y75]: 学生

今日では、様々な国公立大学新構想学部がある。地域研究が、わが国で喧しくなったの

は、第二次世界大戦の終了後であるが、それも特に注目されてきたのは、アジアやアフリカへの関心が高まった 1950 年代の後半になってからともいえよう。しかし、地域研究は決して第二次世界大戦に遭遇したアメリカの国家的理由からのみ発生、発展したのではないのである。そこには学問的理由があると言う。それは 19 世紀以来学問が極所専門分野の交叉し、統一された研究、すなわち cross-disciplinary とか、inter-disciplinary とかと言われる、また最近はやりの「学際的」であるところの integrated studies(総合的研究)という点である。そしてそうした地域研究の傾向を、大学教育における「一般教養」の台頭という 20 世紀の新傾向と結びつけて考究しているホール教授と同じく、ライシャワー氏等も大学の研究教育における、「戦後の革新」と述べている。学問研究の特殊化、専門化というヨーロッパ大陸風の伝統に対し、専門知識の統合によってこそ、生きた対象を把握することができる。そしてこそ、われわれはある対象地域への「全的な接近」が可能となるとする。孤立的事実にかかわる知識を、全体的な知識に高めるために、学際的な地域研究の方法が必要となるのだとする。しかし、諸問題の統一ということは、言うは易いが、行うことが難しいのは周知のとおりである。地域研究を貶値し、攻撃する人々の議論の多くは、前にのべたアメリカの対外政策という、実利的な目的と共に、この総合化という点にかかわっている。

総合科学部は就職活動の時、他の学部より一歩遅れをとっている。そこで総合科学部生は「境界人」になることを目標として学問に励んでいくべきである。「境界人」とは、我が身を形成した人間のことを言い、対象とする外国への我が身の社会化に努力することによって、相手社会の人々に許容され、話し合いのできる人と思われる存在である。境界人は脱日本人ではない。社会間距離を凝視しながら、二つの異文化社会の交錯を我が身の中で、弁証法的統一を行なおうとする苦しい闘いに挑戦する存在なのだ。異文化社会の接触、交流の中であって、断絶する距離、深い深淵、異質を隔てる厚い壁を乗り越え、両社会に通じ合うものを把握する人間こそ、真の国際人(=境界人)というべきであろう。

次に問題解決のための研究スタイル、研究の手続き・論文の書き方についてであった。1,2 年でコース入門を習い、3,4 年で演習をし、卒業研究へと進む。論文は 1 問題提起・研究課題 2 研究手法・仮説立案 3 本論(調査・実験・分析)4 結論・課題というプロセスで書いていく。

「犬にモーツァルト」実験は妥当ではないと思う。数匹だけでは確実性はないし、何とんでも検証結果が何かの数値が出ているわけでもなく、全て主観的なものであるからである。根拠は主観的なものであってはならない。また、音楽で犬の気風が決まったら、「こんな犬になってほしいからモーツァルトの曲を聴かせよう」と、犬の性格もコントロールできるようになる。それでは、犬の個性というものが大事に扱われなくなってしまい、しまいには失われていってしまう世の中になってしまう。想像しただけで薄気味悪いものである。

コメント [y76]: 人間の個性が亡くなったから薄気味悪いですが、犬の個性が亡くなったとしてもそれほど薄気味悪くないのでは。

今回の授業では、総合科学部では具体的にどのようなことを学ぶのかについての講義を受けた。

まず、「専門主義」の野蛮性について述べる。専門家とは、自分の研究した分野については豊富な知識があるが、専門ではない分野については何も知らない。よって、専門家は知者ではなく、「科学者」であり、自分が知らない問題についても無知者として振る舞わずに、自分の専門分野において知者であることに満足しているのだと学んだ。

そこで、「教養人」になるために、幅広い学問や分野を学ぶことができる総合科学部で、自分の無知を自覚して、幅広く学ぼうとする態度を持たなければならないと思った。私は、2年生で国際教養コースに進みたいと考えているが、1年生のうちに一般教養の授業を通して、言語以外の分野についての幅広い知識も身につけておきたい。

また、配布資料の資料5によると、「境界人とは、相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対象比較して行動できる人間である」ので、境界人的存在である「国際人」になるために、総合科学部での学びを通して柔軟性と創造性を養いたい。具体的には、異文化を知るために留学をして、現地でその国の言語を直接学ぼうと思っている。その国についてよく知り、理解した上で、日本と対象比較して、文化の違いなどをより深く学ぶことができるような「国際人」になれるように、積極的に行動していくことが大切だと**思った**。

コメント [y77]: 「思う」を消して理由を書こう。

徳島大学に入学する前は、総合科学部は様々な教科を学ぶことができ、何をしたいかわかっていない私にはこの学部がいいと思い志望した。けれど、いざ自分で教科をきめるとなると何を選べばいいのかわからず困りました。そこは総合科学部のいいところでもあり困るところでもあると**思う**。

コメント [y78]: 「思う」を消して理由を書こう。

今回の授業の中に専門性だけでなく幅広い学習をすることでこれからの社会に役立つ人材になると**聞き**いた。そして、π型教育の重要性を聞いた時、総合科学部の教育方針を知った。一年生の時は専門性を感じないけれど、その中で興味のあるものないものに分類していき、二年三年と上がっていく頃には自分の興味のあるものが決まってきたそれに合った就職先に行けるようになる。社会に出たとき、専門性しかわからない人間ではなく、**広範囲に活躍できる人**になれるよう努めたい。

コメント [h79]: 「学際的・総合的な視点をもって複雑化する社会で活躍できる」ではないでしょうか。

今回の授業は、総合科学部がどのようなところであるかについてのものであった。総合科学部の総合には、幅広い教養、分野を超えた、違った分野の組み合わせ学問の創造、という意味があるようだ。つまり総合科学部は、新しい「学問」と「学問」の組み合わせの創造を目指し学習する場であるということだ。

総合科学部は、法、文、経済学部と違い、幅広い分野の学習プラス専門に応じた学習が

できるので、より多角的に物事を見て、新たなものを生み出せるという強みがある。

加えて、総合科学部の強みとして、高校時代までに明確な進路を決められなかった生徒に対してのモラトリアムとなりうる、という点が上げられる。他学部と違い、大学入学後、様々な基本学習を体験しながら自らの将来像を設計できるところは、総合科学部の強みであると言える。

私が徳島大学を志した理由は、総合科学部があるからだった。「国際人」という言葉の意味や、「境界人(マージナルマン)であれ」というメッセージは、まさに自分が目指している目標そのものである。

国と国、具体的には人と人との間の架け橋のような存在になること。それは単に語学が出来るだとか、物事を知っている、ということだけではない。重要なのは、私たちは人のことや物事を知らないのだという自覚と、それらを知ろうとする積極的な姿勢、行動である。また、自分のことも相手に明快に説明したり、話ができることも重要だ。

謙虚であれ、というのは、水は高いところから低いところへと流れる、ということに例えられる。

どれだけ知っても、私たちは知らないことの方が多い。常にそのことを念頭に置き、だからといって諦めたりするのではなく、自分のできる限り知ろうとすること、学ぼうとする気持ちを大切にしなければならない。

大変意義深い講義だったので、今後も定期的にこのような講義を受講したい。

今回の講義では、総合科学部の学びについて学んだ。大きく分けて二つ学んだ。まず一つ目は、総合科学の言葉についてである。私は総合科学の英訳をこの講義を受けるまで知らなかった。Faculty of Integrated Arts and Sciences という英単語で芸術と科学を合わせたものである。確かに、オープンキャンパスに行った時にまちづくりにアートを組み合わせる事業を見た。「兵庫県の豊岡では城崎大会議館という施設があった。しかし、稼働率は極端に低くさびれる一方だった。ここで、この会館を改修して城崎国際アートセンターを作った。無料でアーティストにスタジオを貸すことで小さな世界都市を作り上げた」(平田オリザ「下り坂をそろそろ下る」講談社・2016・p54)このようにアートによってまちづくりが行えるのである。私の地元でも LED を用いた作品を飾りイベントを行うことで人を集めていました。一昔前と違いアートはより身近なものとなってきた。小さい頃にアートに触れることで子供の感性が良くなるだろう。(改行)

例えば、小さい頃に本物のアートに触れ合うことで大きくなって直感的に判断することができるのだ。二つ目は、専門主義の野蛮化である。今の専門家は自分の専門しか知らない。そうすると他の人の意見などを受け入れにくくなる。そして議論がいつまでも解決し

ない。総合科学部は他の理工学部や薬学部と違い何を学ぶかビジョンがはっきりしていない。以前友達に「理工学だとディーゼルエンジンの実験などを行うけど、総合科学は何を専攻するのか」と言われた。確かに、専門的に学ぶことをすぐに答えることはできない。しかし、専門性だけではこれからの仕事はできない。経済学だけ学んでもそれを述べるための力が必要である。医学を学んでも患者を見るにはカウンセリングする力が必要である。私が徳島大学の面接を受けるときに、様々な学問という抽象的な言葉を使っていました。総合科学部に入ったからには目標を持ち、ビジョンを決めて勉強すべきである。そうしなければ、何も身につかない無駄な4年になる。コミュニケーション能力や協同性を身につけて社会人基礎力を上げていきたい。

今回の総合科学入門講座では、総合科学部の専門性を持たないということを踏まえ、知識人としてではなく、教養人となることを目指すということ学んだ。

徳島大学の総合科学部の特徴として、幅広い進路に進めるというメリットがある反面、それは同時に自分が進路を決定したときには周りより遅れを取っているということ意味する。また、幅広く学ぶふんどうしても浅い知識になりがちである。このようなハンデキャップを考慮に入れて「教養人」として社会で生き抜く力を養っていかなければならない。

「総合科学部とはなんですか？」歴代の先輩方が、就職試験の面接で必ず聞かれるという質問。医学部なら医者、法学部なら弁護士、理工学部なら技師。では、総合科学部は・・・？ 葭森先生はオルテガの書いた「大衆の反逆」よりも面白い話をしてくださった。「科学者(現代でいう医者、技師、財政家、教師等)は専門知識を持っているが、しかしそれ以外知らない。しかし彼らは部分的専門知識を持っているので、知識人と錯覚する。さらに彼らは他分野の知識に関心を持たず、知らないことに口を出す。なら我々総合科学部生はどうすればよいか？専門知識をあれこれあさる必要はない！分からなければ聞け！学べ！それが分かるのが我々だ。」この言葉を聞いた時に自分がやりたいことに方向性が見えた。私は総合科学部で地域創生に携わりたいと考えている。しかし私は地域創生のことは文系の人達で考えればいいと今まで考えていた。しかし、今回の講義でそれでは駄目だと気づかされ、勉強させられた。私も様々な人と関わりいろいろ学んでいこうと決心した。

コメント [h80]: 社会総合科学科は基本的に文系学科ですが、地域創生と関わる情報や環境などに関する授業も実施されています。

総合科学部について、改めて学んだことがある。それは、総合科学という学問が、「あらゆる分野から要素を『集めて』物事を『捉える』」ものではなく、「いろいろな要素を『融合』して新しいものを『創造(創生)』する」ものであるということだ。

それまで私は、他分野からの要素を取り入れた多角的な視点から物事を捉えるのが「総

合」の指すものだと勘違いしていた。だが総合科学が求めるものは「幅広い視野から物事を捉える」だけよりさらに上、そこから「新たなものを生み出す」ことが出来る人材だったのだ。そしてそうなるには「確実な基礎」と、それを応用する「柔軟な発想」が必要となる。

真の総合科学を身につけるため私がすべきことは、まず総合科学について勘違いしていたような固定観念に囚われず、柔軟に物事を考えるための「基礎」を築き上げることなのだと認識した。

今回の講義では、総合科学部での学びにおける理念や教育方針、神髄について学んだ。総合科学部は医学部や法学部と違い、就職への決まったルールがないこと、また専門性に特化していないことが特徴だ。先生がおっしゃっていたように、専門家よりも教養者であることが大切である。

あらゆる職種が機械に取って代わり、身の回りのシステムや日用品に至るまで変化の激しい現代で、一つの分野についての専門知識を持っても仕方がないとだろう。例えば、数年後に小学校でプログラミングが義務教育化されるが、その小学生たちが大きくなった頃にはもうプログラミング自体が古くなっているのかもしれない。このような社会を生き抜くためには、広い視野と知識を持ち、多角的に時代や情勢を捉える思考力と、常に学び続ける姿勢を身につけなければならないのではないだろうか。分野を越えた広い知識を持ち、論理的に思考できるようになりたい。

今回の講義では、総合科学部の理念と学び、総合科学部とは何かについて話を聞いた。総合科学とは単なる様々な領域の組み合わせでなく、それらの領域を融合し、新しいものを想像して創造するということであった。また、オルテガの専門家に対する見解では、謙虚で食欲に幅広く学ぼうとする意欲が必要だと学んだ。そして総合科学の強みとして、柔軟性と創造性を持つことがあげられ、それらを習得するには大学でのまなびの上に自分自身の柔軟に学ぼうとする意欲が必要だと学んだ。キャリアプラン入門を含め、今回の講義でも「π字型」教育プログラムの話をうけたが、このプログラムを知っていると知らないではどう違うのか、なぜ何度も理解させようとするのか知りたい。

今回の講義では、総合科学部とは何かということについての話だった。総合科学部の英語名は Faculty of Integrated Arts and Sciences. Integration とはいろいろな要素を融合して新しものを創造するところに意義がある。総合性には二つの意味が込められている。一つは、ある特定の分野にとらわれずに学ぶという「幅広い教養」、もう一つは、違った分野

コメント [y81]: 個々のソフトは古くなるでしょうが、プログラミングの基本的な理論や技法は変わらないでしょう。

コメント [h82]: いわゆる文学部や法学部のような学部では、多くの場合、思考レベルをベースとした「座学」を中心としたカリキュラムが組まれています（もちろん、大学によって内容に差はあります）。これに対して総合科学部社会総合科学科では、現実的な社会的課題をどう解決していくかを学問ベースに学んでいくために、より実践的な体験型カリキュラムが組まれています。こうした総合科学部の特徴を深く認識することが、総合科学部で学ぶ皆さんが創造的な能力を身につけてもらいたいと考えています。

を組み合わせ学問を創造する「分野を超えて融合する」という意味だ。

オルテガから見た専門家というのは、部分的な専門知識があるので知識人と錯覚し、他の分野の知識を認めたり学ぼうとしない。真の教養人となるには、謙虚さ、無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度が必要となる。

確実な基礎と柔軟な発想、全ての基本、それを身につけるのが総合科学部である。私は将来の仕事について、自分にあった仕事が大学生活の中で見つかるだろうと漠然とした考えを持っていた。しかし今回の講義を通して、全ての基礎を身につけて多くのことにアプローチできる総合科学部の必要性和今後の自分に必要なことが見えてきた。

今回の授業は総合科学部での学びということで総合科学部の成り立ちや総合科学とはどういうものかを哲学的な見方で学ぶことができた。また、総合科学の方向性や、学際性について知ることができた。

総合科学部の強みというのは幅広い分野の学問を学び、その分野を融合して学問を創造することだ。文系の専門知識と教養教育などで培ってきた総合的な思考や幅広い視野で既存の学問を新たな方面から研究したり、新たな学問を生み出すことができる。様々な学問を横断的に学ぶことにより柔軟性や創造性を身に付けることができ、グローバル人材になることができる。総合科学を身に付けるには自分から積極的に柔軟な発想を持って学問を学んでいく必要がある。

今回の総合科学入門講座では具体的な論文の書き方と、総合科学部で何を学ぶか、四年後の目指すべき姿についての話だった。総合科学部とは幅広く何でも学べるという印象を持たれるが、実際のところ幅広い知識を専門的に得ることは容易ではなく中途半端になってしまう。自己の無知を自覚し、人の意見に耳を傾ける謙虚な態度、知識を求める学びの姿勢が大切なのだ。自分を知り相手を知ることによって間に立ち橋渡しをする国際人となることを目指し、学んだことを統合し総合的に見ることで柔軟性、創造性に富んだ人となることができる。

多くのことが学べるからこそ早く目標となるゴールを決めるべきだ。やりたいこと、やるべきことはたくさんある。大学生でしかできない時間の使い方、例えば海外への長期旅行やボランティア活動、アルバイト等を通しての社会経験は時間とお金に比較的余裕のある大学生だからできることである。しかし何もしなくても四年は過ぎてしまう。学んだことからの統合や創造の仕方はその人による。幅広く学んでいく中で自分がどのように統合、創造しどのような国際人を目指すか目標を持って努力することで自分の学びの意義を発見できる。そのため私たちは**目標**を持たなければならない。

コメント [h83]: 目標と同時に、学問的な意味での問題意識を持つことが大事です。

今回の総合科学入門講座では、幅広い知識を持つとはどういうことかを学んだ。私は今まで知識を深めて突き詰めることが幅広さだと思っていたが、幅広い知識を持つと言っても、すべての専門家になる必要はないらしい。本当に幅広い知識を持つということは、他人の言葉に耳を貸す謙虚さや、他の専門を尊重したり学ぼうとする態度を示したりすることであるようだ。

また、今回の授業で一番なるほど、と納得出来たのは、プリントの見出しにあった『専門主義』の野蛮性」という言葉に表されるように、専門家は自分を知者だとしているが、客観的に見るとその専門以外のことは全く何も知らないということだ。テレビでも専門分野には長けているが、それ以外の芸能や一般的なことについて知らない専門家も見かけたことがある。バラエティ番組などでは、何でも知っていそうな人が一般人の多くが知っていそうな問題を間違えると面白いとして放送しているが、それらも今回の講義で学んだことが通ずるのかもしれない。

私はこの授業を通して大学生活の中で、幅広い知識を持つことの意義を知り、その努力をしようと決心した。そのためには、いろんなことに挑戦して、あらゆる立場の人の声を聞き、頭ごなしに他の専門を否定しないように心掛けるとする。それでこそ、総合科学部に所属した意義があるだろう。

今回の講義では、大学ではどのようにして研究を進めていくのか、また総合科学部とは何かということ学んだ。問題解決のための研究の形態として、問題提起から結論に至るまで思考レベルと体験レベルを行き来する「W型モデル」というものがあることを知った。

資料には、専門家は自分が専門とする分野では非常に多くの知識を持つが、他の分野においては全く無知であるというようなことが書かれてあった。確かに、凝り固まった思考に固執したままでは新たな発想が生まれてくることはないため、多くの分野の知識や技術を身につける必要がある。しかしながら、自分の研究対象として、軸とする分野は自身の意見を明確にするために必要である。総合科学部は他学部とは違い分野の幅が広いがゆえ、多角面から研究対象を見ることができる。一方、自分の立場や将来を明確に示せないというハンデもある。よって、研究の入門である今の時期に必要なことは、関心の対象を見出し、問題点を探るため情報収集をすることである。

今回の授業は、二つのことを学んだ。一つは、問題解決のための研究スタイルについてであり、まず、何が研究課題となっているのか、関心のある課題、テーマを中心に取り上げて問題提起をし、探検や野外観察、エクステンシブ調査などをして、それらによって、得られた情報を分析する。その分析結果をもとに仮説を立案し、分析指標を明らかにする

ためのエビデンスやデータの収集を行い、検証をしていくことを繰り返して研究し、文章化していくのだ。二つは、総合科学部についてである。幅広い教養をある特定の分野にとられずに学び、分野を超えて融合し、違った分野を組み合わせ、学問を創造していくというのが、総合性に込められた意味である。そのためには、無知を自覚して幅広く学ぼうとする態度が大切になってくる。

今回の授業で最も私の中で印象に残ったのは徳島大学の総合科学部についての説明だ。経済学部や、法学部、医学部のように専門主義的な性格を持っていない学部だと述べられていた。その総合科学部というものを、英語に直すと Faculty of integrated Arts and Sciences となり、統合的であるという意味になる。このように、総合科学部は総合的に様々な分野に触れることにより、幅広い知識を得られることが世間一般的にも魅力であると伝えられて来た。しかし、その部分ゆえにときどき将来どんな職業に就くべきかなどの難題にぶつかってしまうこともあるということを知り、本人の意識の持ちようによって、結果的に良い道を選ぶことができるかできないかということがかかっている学部でもあるということがわかった。また、私達は境界人というものに属している。そのことを逆手にとって様々なことを経験できる貴重な時間だとも思うので、しっかり視野を広げるといふ心持ちで努めていきたい。また、私自身就きたい職業には、様々な広い分野の知識が求められる職業でもあるので、総合科学部に入って道に迷うという心配というより、この学部で学んだ知識を思う存分活かせる、私にぴったりの学部であると感じているためこの調子で統合的に様々なことを学んでいくつもりである。

次に、心に残っているのはメールの送信の仕方を学んだことだ。メールをうまく活用できない人が多くいるということに驚いた反面、私自身も最近では LINE などの SNS の活用が多いためうまく使えるか不安になった。これからメールを使った連絡がまた増えると考えられるので、しっかりと学んだことを使って活用していきたい。

引用する論文の選び方について「何冊か論文を見つけてその中で明らかに違うものがあるからそれは間違っている」と言われていたが、本当にそうなのだろうか? 「少数派は必ず間違っている」と捉えられる言い方に聞こえたが、私はそれについて反対である。なぜなら、その一つが今までになかったあたらしい発想をもたらしてくれる可能性があるからだ。

教科書を読んでみると、具体的でユニークな例が挙がっており非常に読みやすかった。私が納得したのは「ハイブリットカーは実は環境に良くない」(山口裕之『コピーペと言われないレポートの書き方教室』新曜社,2013,p.46)から始まる文章である。ただ、このレポートを書いているときにも疑問に思ったのがなぜ引用カッコ内は「、」ではなく「,」なのか。わざわざ打ち直すのが億劫になるのは私だけなのだろうか。

コメント [y84]: 間違った論文をどうやって判断するかについて、皆さんが取り組める簡単な方法として言っただけで、少数派が必ず間違っているなどとは言っていません。

レポートを書くために調べるときには、関連する論文を調べて読むのが良いですが、一つの学問分野をきちんと学ぶためには、基本的な理論を教科書などで学び、応用問題を解き、実験や調査で実践することが必要です。そうした訓練を受ければ、トンデモ論文なのか、革新的な新しい発想をもたらす論文なのかが見分けられるようになります。

コメント [y85]: 教科書 39 ページに書いてあります。

「牛にモーツァルトの曲を聞かせる」の検証で「三種類の犬種それぞれに違った作曲家の曲を聞かせる」ということだが、これには大きな間違いがある。対照実験になっていないのである。条件を一つだけ変える、というのが対照実験なのである。あの実験ではゴールデンレトリバーにモーツァルト、柴犬(メス)にシュトラウス、柴犬(オス)にバッハという犬種も性別も作曲家も変えている。これではもしゴールデンレトリバーがシュトラウスを聞いた場合どんな風に育つのか知ることができない。他も同様である。また、私は年齢も関係するのではないかと考える。なぜなら犬もものの覚えやすさや耳の良し悪しが変わっていくからである。

コメント [y86]: その他にもたくさんの問題点があります。考えつく限り挙げてみましょう。

私が総合科学部に入学した理由は、他の文系の学部と遜色がないと思ったからだ。私自身入学する前も、入学した後も総合科学という学問について深くは考えなかった。オルテガは専門家のことを、傲慢で、他人の言葉を聞き入れず、自らのことを知識人であると自画自賛していると非難している。確かに、一つの専門分野を突き詰めるのは素晴らしいことだ。しかし、視野を広げ、他人の意見を聞き入れることによって新たな発見が見えてくる。医学部なら医療関係のことしかししないし、法学部なら法律関係なことしかししない。多くの学問に接することによって、柔軟性と創造性が培われる。これこそが、総合科学の特色である。

今週の授業は総合科学部での学びのことだ。まずは発想法という研究スタイルだと研究の手続きを説明した。将来の4年の間にどのような自分の感心した問題を研究して、どのようなこの問題に対する自分の仮説を証明することを説明した。その後で、総合科学部の話だ。私は今まで総合科学や教養人などのことをあまり考えなかった。確かに、自分の将来のために、自分の専攻を考えて、そこに向かかなければならないか、確実な基礎と柔軟な発想を身につけることよりはそれほど大切ではない。基礎がなくなったら、専攻がどれほど進んでも意味がないだろう。

今回の授業では、総合科学とはどのようなものであり、これからどう活用していくべきか学んだ。まず、この総合科学部の「総合」は英語での"Integrated"にあたり、「統合する」という意味がある。つまり、ただ様々な分野のことを学ぶということではなく、様々な分野を統合して新しい考えを生むことが総合科学の目的である。

また、国際化が進む現代に必要とされているのは、ただ英語が話せる能力を持った人物でなく、相手の社会を理解し、自分の社会との違いを考え、柔軟に対応できる人物である。人と人とのコミュニケーションは社会で生きていくうえで必須であるので、自分とは違

った社会を持つ相手のことを理解するというのは、国際関係の場合だけでなく、もちろん重要なことになる。

ただ専門性を身に着けるのではなく、様々な分野を学び、総合的に社会を理解する総合科学は、そのような社会におけるコミュニケーションの力を身に着けるのに大いに役立つだろう。

最初は答え合わせや前回の復習をした。また、メールの出し方などの説明を聞きました。次は、徳島大学合科学部での話を聞き、ホームページで「発想法 問題解決のための研究スタイル」について詳しく聞いた。そこには、思考レベルや体験レベルがある。

また、徳島大学 総合科学部での英語名を教えてもらった。integrate (全体にまとめる、完全にする、完成する)などの意味があるなどの説明を聞いた。

資料 2 では「専門主義」の野蛮性についてで、オルデガの専門家と教養人の理解のなかには、専門知識があるので知識人と錯覚する内容だった。真の教養人は、「他人の言葉に耳を貸す」「無知と自覚して学ぶ」ことが大切になる。

資料 3 では国立大学新構についてだった。徳島大学は 3 つの中の文理融合型にはいる。

資料 4 では、地域研究とは何かについてだ。資料 5 では境界人(Marginal Man)についてだ。境界人は相手の社会を知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる人間である。と知った。

今回の授業は**難しいこと**が多かったです。でも境界人などをもっと知りたいと**興味が出**た。

今回の授業では、初めに「総合科学の理念と学び」についての話を聞いた。発想法というのは、思考レベルと体験レベルの二つが問題解決のための研究スタイルとして大事となる。また、論文を書くには、まず問題提起をその次に仮説立案それから本論で調査・研究をし結論へと結びつけ文章化して行くことが必要だ。後半は、「総合科学とは何だろう？」という話を聞いた。総合科学部というのは幅広い知識を学ぶだけでなく学際性を身につけることができることを知った。授業で言っていたように自分も総科と言われると幅広く色々な事を学ぶことが出来るとだけ思っていたが、それだけでは**就職活動において弱い**のでこれからの大学生活において学際性を身につけられるよう学んでいきたい。

「総合科学部で学んで将来何の仕事に就くのか」

私は中学生の頃から教師になることを志していたためその点について疑問に感じたことは無かったが、私の高校の友人が受験生の時期にそう言っていたことを思い出した。

コメント [y87]: 具体的にどこがどうして難しかったのか説明してください。「難しいことが多かった」では、補足説明のしようがありません。

コメント [y88]: では自分で文献を読みましょう。

コメント [h89]: 就職活動のために総合科学部で学ぶのではなく、社会現象・文化事象における様々な課題に対して多義的な思考力を身につけるために、総合科学部で学んでください。そうした能力が身につくことで、自ずと社会人基礎力も涵養されてきます。

「いろんなことを満遍なく学べる」と高校の先生が勧めたものの、友人は「それでは高校の普通科の延長みたいだ」と言い、私も総合科学部について漠然とした印象とコース選択があるということしか知識がなかったため、その友達に何もアドバイスしてあげることが出来なかった。

大学の教育方針を、友人や私の様にほとんどの人が学部や学科で判断している所がある。そして、もっと大学の教育カリキュラムについてよく調べておく必要があるということを知り、私は改めて総合科学部の教育課程でやりたいことを考えた。

教養知識を身につけた上で自分の専門課題を総合的な視点で観察する能力を身につけ、将来は総合科学部出身だからこそその強みをアピールできる様な社会人になりたい。

今回の授業の主なテーマは、徳島大学総合科学部についてだった。

徳島大学を受験する前にホームページで総合科学部の教育方針や教育目標を見たことがあったが今回の授業で、当時は知らなかった、総合科学部の歴史や様々な取り組みを知る事が出来た。私自身友人から総合科学部を卒業して将来何になるのか分からないと言われる事が多くある。しかし、将来なりたい職業が決まっていなくても総合科学部で幅広く学ぶ事で色んな知識を身につける事が出来ると思う。これから総合科学部の色んな取り組みに参加していきたい。

今回はいつもとは違い、山口先生、平井先生、葭森先生の三人が一人ずつ順番に講義を行う形の授業だった。まず初めにあったのは山口先生によるメールの書き方について簡単な説明である。件名の部分に本文を書いてはいけないことや本文の最後には自分の名前と肩書を書かなくてはならないことを教わった。

次に、前回の小テストの解答と学生コメントへの応答についての説明がなされた。学生コメントの中には質問をせずとも教科書を読めば解決する問いが多く、私たちレポートを書く際の注意点について知るために教科書を読み、論理的な思考力や判断力を身につけるために書籍や論文をたくさん読むべきだということが分かった。

その後平井先生による講義が行われた。平井先生が説明してくださったことは二つあり、「問題解決のための研究スタイル」と「研究の手続き・論文の書き方」についてである。まず1つ目の「問題解決のための研究スタイル」についての説明では思考と体験を繰り返すことにより問題解決に繋げるW型モデルというものを紹介していた。しかしそのW型モデルは全ての学問分野において適用されるものではなく、考古学や民俗学などの野外科学と呼ばれる学問に適用されるそうだ。

2つ目の「研究の手続き・論文の書き方」についての説明では、卒業論文を書くために四年間で行うべきことが示されていた。具体的には1・2年時では問題意識や関心テーマを持

ち、そのテーマに関連した文献の収集や整理や先行研究動向の整理をすることが求められていた。また、3・4年では仮説を構築し、その仮説を明らかにするために必要な証拠やデータを収集し、そこからオリジナルデータの構築や客観性の担保のために仮説の検証を行う。そして再調査や再分析を経て、これまでの手続きを順序立てて文章化し、説明することが示されていた。

最後は葭森先生による講義である。葭森先生はまず「総合科学とは何か」という問いを学生に問いかけた。私は総合科学が何たるかについて深く考えたことがなかったため、幅広く多様な視点から物事を考える学問なのだろうという漠然とした考えしかもっていなかった。しかし「総合」という意味を表す「integrate」には「多様」や「多い」という意味はない。総合とはいろいろな要素を融合して新しいものを創造することに意義があるのだ、と説明があった。その上、総合性には二つの意味が込められており、一つ目は幅広い教養を持ち、特定の分野にとらわれずに学ぶこと、二つ目は分野をこえて学問を創造することだ。しかし一概に「幅広い教養を持つ」と言っても、我々凡人がありとあらゆる知識を身につけることは難しく、せいぜい一つの分野に取り組むだけで精一杯である。それではそうやって幅広い教養を持てばいいのか、という問いが生まれるが、幅広い教養を持つ者である教養人が全ての物事について知っている必要はないとオルテガは言った。それよりも知らないことは知ろうとし、他人の言葉に耳を傾けられることが大切なのだ。なぜなら一つの分野について知っている専門家は時として自身を知者であると思込みがちである。ただ一つのことを詳しいだけでそれ以外については全く何も知らないのにも関わらず、彼らは自身の詳しくない分野にも首を突っ込んでいく。しかしそれはただその場をかき乱すだけで何の解決策も生まない。そして私たちの所属する総合科学部はこういった「専門家」を育てる場所ではないのだ。総合科学部は様々な分野について学ぶことができるという長点をもっているが、そのことによって得られるものは幅広い知識だけではない。分野の枠を越えて学ぶことにより柔軟な発想を持つことができるのだ。そして確固とした基本的な知識と柔軟な発想は様々な要素を組み合わせることで新しいものを創造することにつながる。

総合学科において何を学びどんな人間になって社会に出て行くのか。

総合という名前は一般的に全てを学ぶものと思われているが、全てを知るなんてダヴィンチでもあるまいし不可能である。総合学科において重要なのは、専門的な知識を幅広く広めていく事であり、そのために私たちは専門的な知識を探求するだけでなく、世界に発信するコミュニケーション能力や知識が重要である。

コメント [h90]: 知識だけでなく、その思考力・研究アプローチ法についても理解を深めて欲しいものです。

今回の総合科学部入門講座は、主に問題解決のための研究スタイルと、研究手続き、論文の書き方そして、総合科学部という学部が一体どういった学部なのかという説明であっ

た。まず初めに山口先生から前回の講義の復習を行っていただいた。

続いて、葭森先生から w 型モデルによる問題解決のための研究スタイルを教えていただいた。そして研究の手続き、論文の書き方について一年から四年までの流れを教えていただいた。まず、具体的には一年・二年では、問題意識・関心のテーマ、関連文献の収集・整理であった。三年・四年では、どのような研究課題について、どういった事象 or どこの地域を対象に研究するか、つまり仮説の構築を行い、その課題・仮説を明らかにするために何を調べるかという分析指標を行う。さらには、その分析指標を明らかにするための証拠やデータを集め、検証やオリジナルデータを構築し、検証結果・仮説の検証を再調査・再分析を行って文章化するというものであった。

そして、平井先生から、総合科学部という学部が一体どういったことを行う学部であるのかということを知って教えていただいた。まず初めに、総合科学部の英語名である Faculty of Integrated Arts and Sciences という名前を教えていただいた。その話に続いて、総合科学部という学部では多くの専門知識を身につけなければならないという訳ではなくて良いとおっしゃった。さらには、現代に於いて、「専門主義」の野蛮性という題目で現代にいる専門家と呼ばれる人たちは自分が知らないことがあるということを知らないとために野蛮であるため、この総合科学部という学部では、全てにおいて専門知識を身につけようとするのではなく、学ぶときには謙虚に、積極的に学ぼうとし、自分が知らないとことがあるということを知ることが大切であるということをおっしゃっていた。そして続いては、各国公立大学の新興学部への歩みについての説明をしてくださった。さらには、「地域研究とは何か」という題目で、戦後から盛んになっていった地域研究の歴史の流れというものを教えていただいた。最後に、総合科学部で学ぶことで「境界人(マージナルマン)」となり社会間距離を凝視しながら、二つの異文化社会の交錯を自分の中で、苦しい闘いに挑戦する存在となり、真の国際人と呼べるべき人物を目指して欲しいということであった。

今回の総合科学部入門講座の講義の中で、私は「専門主義」の野蛮性についてが心の中に留まった。現在ニュース番組等で多くの専門家と呼ばれる人々がコメンテーターとして出ている。その中で彼らは自分の専門分野とするもの以外までもを、あたかも自分の考えが根拠のあるものであるかのような発言をしている。確かに言論の自由は尊重されるべきである。しかしながら、専門分野でなければもちろん知識も我々一般人と同等程度のものである。にもかかわらず、自分の考えが正答であるかのような発言を許して良いだろうか。もし彼らにソクラテスの行った産婆術を行って見たとしたら、彼らの発言がいかに根拠の薄いものか明らかになるであろう。このことを考えると自らを無知であることを自覚せずにいることは、結果として恥を搔くのである。そうであるのならば、私はソクラテスのように自らは無知であることを自覚し、その無知から大学、バイト、友人・家族との会話、読書などを通し、知識を深めてスポンジのように知識を吸収していくことが大切である。無知を自覚することは恥だと思われがちだが、浅はかな知識を披露するくらいならば、無知であることを自覚し、正しい知識をゼロから身につけることがどれだけ大きな財産にな

コメント [y91]: 心に残った

コメント [y92]: 具体的にだれがどんな発言をしていましたか？

コメント [h93]: コメンテーターが行う専門外の発言に対して、もしそれが間違えている(ように思う)のであれば、自らそれを指摘するだけの論理と根拠が必要になります。

るかを気づくべきだ。なので私はソクラテスのように無知であることを自覚し、大学の講義を受講する。

今回の講義では、総合科学部について改めて学んだ。大学の講義や留学などの経験、専門的知識と社会的知識を用いて、幅広い知識から多様な視点を得る。そこから現代社会や地域の課題を理解、解決を行う実践的な人材の養成を総合科学部は目的としている。また、総合科学部の強みと弱みについても学んだ。総合科学部の長所は法学部や経済学部のような決まった学問の枠に囚われず、幅広い分野を学ぶことが出来ることだ。しかし明確な目標を持たずに曖昧なまま日々を過ごしてしまうと、先ほどの長所が短所にもなる。例えば「この4年間の大学生活で何を学んできたのか」と聞かれた際に、法学部は法律を、経済学部は経済学を学んだと答えるのに対し、総合科学部は学べる学問の枠が広いと、具体的に自分の将来を見据えて決めることが出来ていなければ、他学部よりもあやふやな学問になるからだ。また、浅く広いような知識だけでは複雑に問題が絡み合う現代社会の中を生き残ることは出来ない。そこで専門分野についてさらに深めたり、学問と学問のすきまを上手に活用、また柔軟に創造することも必要だろう。

そして、講義内で先生は『知らないことを知る』ことは大切だ』とおっしゃっていた。私もこのSIH道場や他の講義を通して、またレポートを書くたびに、論理的な主張を明らかに示すための客観的な根拠の重要性を強く感じる。しかしまだ自分が持っている知識が少なく、なかなか説得力のある文章を書くことが難しい。また、徳大生になりはや1ヶ月が経とうとしている。振り返ると、講義を受けて入学前に持っていた将来の目標を叶えたのならば、私にはまだまだ文章力や経験、知識量が足りないことを自覚した。だから「考える」ことや反復練習、失敗と成功を重ね、徐々に良い文章にしていく必要がある。この講義では他人のコメントを読むことが可能であるため、他人の上手な文章構成や主張の書き方、ためになる指摘など、自分の中になかった知識を多く学ぶことが出来る。これもまた徳島大学総合科学部にいる生徒や先生だからこそ得られる知識だ。総合科学部の強みを最大限に生かし、自分の能力を高めていきたい。

今回の講義はけやきホールで行われた。始めに山口教授から、メールの書き方を教わった。普段私たちが連絡手段として使うことの多いLINEと違いメールは要件を打ち込むところと件名の欄がある。教授への連絡や就活の時にメールのやり取りをする機会が多いが、その時に件名の入力をおぼろげにしてはならない。その理由は教授にそのメールが迷惑メールだと思われるからであるが、教授や送信先の人に名乗らず要件だけを送ることは社会で守るべきマナーを守れていないことを示している行為である。件名の入力はおぼろげなことである。

総合科学についての講義は総合科学というものは何なのかについての説明から始まった。総合科学は相手の話にしっかり耳を傾け自分が何者かを話すことができ、すべての力、「総合性」を身につけることである。「総合性」は幅広い教養を身につけ、ある特定の分野にとらわれず分野を超えて学ぶことで身につく。専門家は自分がすべて知っていると思い込んで他人の話や考えの主張に耳を貸さず、偏った認識により間違った判断をしてしまう者もいる。専門家になってはならない。幅広く知識を身につけて総合科学部としてたくさんの知識を取り込まなくてはならない。総合科学部には医学部や歯学部のように必ずこの職業に就く、というものはない。良い言い方をすると、職業の幅は他学部より広い。総合科学部は多種類の要素を融合し新しい物を想像する学部なのだ。

今回の授業では前回の授業コメントの返答や教科書の内容理解に関する小テストから始まった。その後に総合科学部の分野や、一般的な定義についての説明を受けた。法学部には弁護士、医学部には医者というように、他の学部には各学部で学ぶことで目指す職業などがはっきりしてくる。しかし総合科学部にそういった決まりはなく、総合科学部だからといって総合科学者というものがあるわけではない。

私達総合科学部生が目指す道はどこなのだろうか。今回の授業の説明にもあったように自分の無知を自覚し、人に教わる姿勢を進んで心がけることが大切だ。そうすることで幅広い知識と考察力を持ち、**他の学部とは違うこと**を考えることができるのだ。

コメント [y94]: 具体的にどんなことを考えますか？

今回の授業では、私が所属している「総合科学部」について考えた。

大学とは、専門的なことを学ぶ場である。そして医学部なら医者や看護師、法学部なら弁護士などといったように、学部によって卒業後の進路を大まかにイメージすることができる。しかし総合科学部は、その名前を聞いただけでは卒業後の進路のイメージが湧きにくい。何を勉強している学部なのかということも分かりにくい。実際、私が総合科学部だと地元の友人に話した時、彼女は総合科学部を理系の学部だと勘違いしたようであった。また総合科学部を卒業した私の知り合いも、就職の面接の時、まず最初に「総合科学部で何を勉強しているのか」を聞かれたと言っていた。総合科学部というと、いろいろな分野のことを幅広く学べそうだと思うことが多い。しかし「総合」には、ある特定の分野にとらわれずに学び、それだけでなく分野を越えて融合する学問を創造するという意味が込められている。総合科学部だからといって専門知識をあれこれあさる必要はない。自分の無知を自覚し、知らないことを学ぼうとし続けることで教養が身につく。そして既定の概念に疑問を持ち、幅広い視野でものを見たらうえて新たなものを生み出す柔軟性と創造性こそが、総合科学部の強みである。

総合科学部はあまり知られていないというハンデもたしかにあるが、総合科学部でしか

学べないこともある。私は大学に入学し、今日まで約 1 か月間授業を受けてきた。語学や心理学、地理、情報など様々な分野の授業がある。文学部などに行っていたらおそらく勉強していなかったであろうことも勉強することができている。それは総合科学部の強みだと思った。

今回の授業では、総合科学部の理念と学び、すなわち総合科学部とは何かということについて話が進められた。まず、総合科学部の「総合」は、いろいろな要素を融合して新しいものを創造するところに意義がある。言い換えると、総合することにより何かを作り出すのである。では、どんな課題や可能性があるだろうか。前提として「総合性」には二つの意味が含まれている。一つ目は幅広い教養であり、ある特定の分野にとらわれず学ぶことができるのである。しかし、ここでいう幅広い教養とは、「何でも知っている」ということを指すのではない。自らの無知を自覚し、幅広く学ぼうとする態度をもつことである。分からなければ聞き、学ぶことが大切だ。その際、他人の言葉に耳を傾ける謙虚さを忘れてはならない。二つ目は分野を超えて融合することである。違った分野を組み合わせ、学問を創造することができるのだ。例えば、国際と文化、地域研究と科学などが考えられる。

では、これらの意味を踏まえたうえで、総合科学の目指す道とはどのようなものか。ただ幅広い知識を持っていても社会では生き残れない。だから、総合のもう一つの姿、「学際性」で勝負するのである。ここでは地域研究型と専門学部隙間型、分離融合型に分類される。それぞれが他の学部では実施されない学問である。幅広い知識を基本として、専門に応じた学際的知識を習得できるのも総合科学の魅力だ。これらの特徴を生かすと、総合科学の目指す道が見えてくる。それは、既定の概念を疑いその間で考え、疑問を持ち幅広い視野でものごとを見たいうえで新しいものを生み出すということだ。これが総合科学の目指す道であり、この過程に必要な不可欠な柔軟性と創造性が総合科学の強みである。

総合科学というと、幅広い学問ができることや夢が広がると言われる一方、結局ゴールは何なのか、目標や概念も曖昧なものそうだ、とれわれがちである。だからこそ、実際に自分が後者のようにならないためにも、「総合科学」の意味を常に認識し、学問を深めなければならない。

今回の授業では、総合科学部について学んだ。知らないことがあることは、悪いことではなく、そこから学ぼうとすることが大事であるということを理解した。また、総合科学部の強みは、柔軟性と創造性であるということも理解した。また、思考レベルと体験レベルを繰り返しながら学んでいく、ということも理解した。

フィールドワークは大事である。その地方に住んでいる人はどのような気持ちなのか、その地方をどのようにしたら活性化させることができるのかなど、現地に行かなければ分からないことは、たくさんあるからだ。また、その地域の人々とコミュニケーションを築

コメント [y95]: 人間関係 (?)

き上げることもできるからだ。

今回の授業では、総合科学とは何かについて学んだ。総合科学部は、医、法、経済、文学部とは違って、卒業後どのような職に就くのか世間ではあまり知られていない。このような点で、総合科学部に入学した私たちは知らない間にハンデを背負うことになってしまったということを教えられた。総合科学部は、多くの人が幅広く、様々な分野を学ぶことができるというイメージを持っているが、本当にそうなのだろうか。総合科学部の英語名は、Faculty Of Integrated arts and Science であり、バラバラな物事を一つにまとめて新しいものを創造するという意味がある。それは、単に全ての分野で研究者のように知識に優れた人になるということではない。真の教養人となる為に、他人の言葉に耳を貸す謙虚さや、他人の専門を尊重し学ぼうとする態度が非常に重要である。総合科学は、相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる境界人となるために存在している。そのような人になるために、総合科学部に入学した私たちは、大学生活の中で、相手を知り、自分を知る柔軟性や創造性を身につけていかなければならない。

次に、今回の授業に対する意見として、総合科学部のイメージとして「入学後に進路を決めることができる」という点をもっと全面的にだしてもよいのではないかと。なぜなら、大学に入学する時点で、すべての人が卒業後の進路が決まっているわけではないからである。例えば、文系の場合、文、法、経済学部などに入学すると、学ぶことや卒業後の進路がある程度決まっている。入学してみてイメージと違うなどの理由で退学したり再受験する人もいる。徳島大学の場合、2年生でコースに分かれるまで1年間考えることができる。様々な分野の授業を通して本当にやりたいことを見つけることができる。つまり、この点が他の学部と違う総合科学部ならではの魅力なのではないか。

よって、これからの社会求められる人材は、ある分野の知識だけに突出した人ではなくあらゆる分野を学び物事を多面的に見ることができるひ人である。このような人になるために総合科学部で学ぶというのは強みになるのである。

今回私が学んだことは、総合科学部の理念についてです。当初私は、総合科学部という学部は総合的に物事を観察してゆく学部だと考えていました。しかしそのためには何よりもまず幅広い知識を学んでいくことが重要です。幅広い知識を取り込むことで初めて総合的に物事を観察することが可能となります。観察の仕方の土台となるべき知識がしっかり取り込まれていないと、物事を真に理解することはできないのです。

また、総合科学部は世間的に目指すべきもの(就職先など)が分からないといわれる面がありますが、一方、新たな学を新設する可能性を秘めるという面もあります。総合科学部では幅広い知識があり、また色々な視点から物事を観察するというのも学ぶため、誰も思

コメント [y96]: 東京大学と同じですね。

いつかなかったような新たな視点から物事を観察する人が出てくる可能性があります。

総合科学部は世間によく分からないイメージを抱かれがちですが、興味のあるものは何でも幅広く学び、総合的に物事を観察することを目指す学部だということを認知してほしいです。

授業内容は総合科学部とは何か、どのような経緯で設立されたか。ただただ、専門的なものを学ぶだけでは、野蛮化し、何でも知っているかのように振る舞うようになり害化してしまう。なので、総合科学部で専門科目だけではなく美術や音楽、スポーツといった、自身の供用を豊かにするような講義も積極的にとって、知識の多様化を進めていきたい。
質問

どうにかして客観的に述べようと「思う」を使わなかったり、他の論文を引用してきたりしてみても、どうしても感想や個人的見解が混ざってしまう。だからと言って引用部分を多くすると、コピペのようになるし……。どうしたらいいでしょうか。

今回の授業では、総合科学部での学びについて聞いた。例えば、総合とは、バラバラのものを寄せ集めることではなく、いろいろな要素を融合して新しいものを創造するところに意義があるということを知った。また、総合性に込められた2つの意味のうちの1つである幅広い教養に関しては、何でも知っているということではなく、特定の分野にとらわれずに、そして、無知を自覚して学ぼうとすることであると学んだ。

私は、進みたいコースは決めているが、総合科学部では、入学してから進路を考えられる、様々な観点から物事を見ることができるとい、授業でも述べられていたイメージを持っていた。しかし、今回の授業で、様々な観点から物事を見るだけでなく、それらを融合して新しいものを創ることが総合科学部での学びであると知り、納得した。

医学部や法学部、文学部などは、大学で専門的なことを学び、将来何になるかも決まっていることが多い。それに対して総合科学部は、基礎を学び、柔軟性と創造性を身につける。他の学部では身につけられないこれら2つが総合科学部の強みであるので、総合科学部に入ったからには、この2つをしっかり身につけるために、謙虚な態度で、知らないということを自覚し、積極的に学んでいく必要がある。

4月28日の授業は、小テストの答え合わせから始まりました。その後に、総合科学部とはどのような学部であるかについて学びました。医学部を卒業した人は、医者や看護師になり、法学部を卒業した人は、法学者や弁護士になります。しかしながら、総合科学部を卒業した人が、総合科学者になるわけではありません。総合科学部では、「国際人」の育成

コメント [y97]: みなさんがどのような人間になるかということによって、総合科学部がどのように認知されるかが決まってくるのです。

コメント [y98]: 他の学生さんのコメントを見てみましょう。まず、長さが違います。なぜか。あなたのコメントには具体性がありません。理由も書いてありません。たとえば、「知識の多様化」とは具体的にどういふことなのか、なぜそれを進めなければならないのか（あなたが「進めたい」で終わってしまったのはただの感想です）。これまでの授業で言ったとおり、まず具体的に書くこと、理由を書くこと。そこから始めてください。最初はできなくても当然です。だから練習するのです。

を目的にしています。「国際人」とは、相手の社会を知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる境界人的な存在です。

たとえば、専門家は、自分が研究していることについてはよく知っていますが、それ以外のことについては、全く何も知らないのです。自分の専門以外は、全く知らないのであるから知者とは言えません。しかし、無知な人間でもないのです。一方で、総合科学部は、幅広い知識をもつ国際人を輩出できる学部となっていると言えます。したがって、多くの国際人を育成する学部です。

今回の授業では、最初にメールの書き方や前回についての反省やコメントの後、総合科学部や総合科学についての説明を受けた。総合科学部についての説明は大きく二つの話に分かれる。「総合科学部の理念と学び」と「総合科学とは何だろう?」という二つである。

まず、一つ目の大きな話である「総合科学部の理念と学び」についての話を聞いた。問題解決のための研究スタイルである発想法やW型モデル、アクティブ・ラーニングの一種であるブレインストーミング(集団発想法)についての説明を受けた。W型モデルは思考レベルと体験レベルの二つに分類される行動を交互に行うことで基礎知識や情報収集能力などの知識の収納庫を強くしていくことができると聞いた。詳しく説明すると、最初にする行動は「問題提起」、次に探検として「野外観察」や「エクステンシブ調査」をする。「エクステンシブ調査」とはどのような調査か疑問を持ったので調べた。電子辞書のブリタニカ国際大百科事典によると、「ある社会事象に関して比較的少数の因子について多数のサンプルを対象に広く横断的に調査する方法で、統計的調査の形で行われる場合が多い」とある(ブリタニカ国際大百科事典子項目電子辞書版 ブリタニカ・ジャパン 2013年 項目「エクステンシブ・メソッド」)。また、これらの調査の後発想法を用いて「課題分析」を行う。更にその後、演繹法を用い「仮説立案」をする。そしてテストをした後、「実験観察」や「インテンシブ調査」を行う。その後帰納法(検証)をした後、「結論」を出す。そしてまた「仮説立案」をした後、再検証を行い、再び「実験観察」や「インテンシブ調査」を行うというプロセスを繰り返す、というものである。この一連の行動を繰り返すことで基礎知識や情報収集力の力がついていくと聞いた。

また、研究の手続きや論文の書き方についての説明も受けた。この研究の手続きや論文の書き方は、どの分野であっても基本的には同じであると聞いた。研究の手続きとは、一年・二年次のコース入門ですべきこと、三年・四年次の演習ですべきこと、そしてそれらを最終的に卒業論文に繋げるということである。また、論文の書き方の説明も受けた。最初に問題提起・研究課題を見つけ、研究手法・仮説立案をたて、本論(調査・実験・分析)をした後、結論・課題を導くというものであった。

次に、二つ目の大きな話である「総合科学とは何だろう?」についての話を聞いた。最初に、そもそも総合科学部とはどのような学部なのかという話を聞いた。その中で、総合科

学部に対するイメージが幅広く様々な観点から学ぶことができるというものであると知った。また総合科学部を表すのに使われる英語は決まっておらず、それぞれの総合科学部で重視されていることにより異なると知った。次に総合する価値や総合性に込められた意味についての説明も受けた。その込められた意味とは二つある。一つ目はある特定の分野にとらわれずに学ぶことで得られる幅広い教養、二つ目は分野をこえて融合したり組み合わせたりして学問を創造するということである。そして、これらの意味を正しく理解し真の教養人となることを目指すことが大切だと聞いた。また、この二つに加えて「学際性を追求する学部」についての話も聞いた。学際性を追求する学部には大きく分けて三つの型がある。一つ目が「地域研究型」、二つ目が「専門学部隙間型」、三つ目が「文理融合型」である。私は、特に「地域研究型」の学部に興味を持った。大学院で進みたい学校の名前があったというのが最初に興味を持った理由だが、説明を聞いてみると、第二次世界大戦中に対日本戦略としてアメリカで誕生した学問を今日本で学んでいるということに少し皮肉めいたものを感じたということも大きい理由である。

最後に総合科学の原点に立ち戻った。総合科学の原点とは、「境界人」になることであった。この「境界人」とは「国際人・グローバル人材」と同義である。また、「境界人」や「国際人・グローバル人材」となるには柔軟性と創造性が必要であると学んだ。

今回の授業で、「総合科学部とは何か」ということがはっきりとわかったわけではない。しかし、この四年間の大学生活で身につけるべき力は何かということはわかった。今回理解したことをしっかりと身につけ、「境界人」、「国際人・グローバル人材」となり将来に繋がられるように努める。

私は将来の具体的な進路を決めることができず、総合科学部についてあまり調べずにただ文系の学部というだけで入ったというような短絡的な人である。総合科学部で学ぶことへの意義や目的意識をもっていないので、専門的な学習をしている人やきちんとした目標を持っている人から後ろ指をさされているような気持であった。しかし、総合科学部で学ぶことにも大きな意味があって、専門性はなくとも、教養を学び、幅広い知識や視点を持ち、あらゆる課題を解決することができる能力を養うことができる。時代の変化に対応していける能力はこれからの社会にとってより重要となってくるものだろう。総合科学部での学びと自分の将来とを直接に結びつけるのは難しいが、能動的に学習していきたい。

今回の総合科学入門講座では、まず論文を書く上での研究の仕方や論文の書き方についての説明があった。次に、総合科学部とはどのような場所であるかという説明が行われた。総合科学部についての説明の中で、専門家について否定的な説明が行われた。しかし、今

コメント [h99]: Area Study という総合科学的な学問分野で、日本では「地域研究」などとも言われています。地域研究・地域科学も学際的研究アプローチにもとづく研究分野ですが、授業時にも説明したように、既存の人文科学・社会科学といった既存の専門分野だけでは解決できない新たな課題に対応するために、地域科学と同様に環境科学や健康科学など、新たに発達してきた総合科学的・分野横断的な研究分野は数多いです。

日の私たちの生活はこれらの専門家達の知識の集結によりできていると言っても過言ではない。確かに、専門家はマイノリティーであり、一般の多くの人々にとっては広く浅い知識が求められる。だが、専門家やそうでない人でも、本当に大切なのは得た知識を臨機応変に活用できるかではないか。つまり、何よりも大事なのは自分の学びに対する姿勢である。

コメント [h100]: ただ「学ぶ」だけではなく、社会現象や文化事象に対して問題意識を醸成し、その課題解決に向けて主体的に取り組む姿勢が大事になります。